

国際ワークショップ

学術資料としての『型紙』

―資料の共有化と活用に向けて―

報告書

国際ワークショップ

学術資料としての『型紙』—資料の共有化と活用に向けて

報告書

ごあいさつ

近年、世界各地で染色型紙の展覧会や研究集会が開催され「型紙の学術研究」が盛んになりつつあります。しかし、これまでの型紙研究は研究者個人や各所蔵機関が独自に進め、手法も確立されてきませんでした。大量に現存する型紙を整理するには、研究者や所蔵機関が連携をとりながら進めるべき時期を迎えています。

国を超えた連携には、デジタル技術やウェブが必要不可欠となります。これらを駆使して各所蔵機関が連携をはかるためには、何が必要なのか、国内外の所蔵機関が抱える問題点と課題を洗い出し、理解を共有したいと考えましたのが、国際ワークショップ「学術資料としての『型紙』—資料の共有化と活用に向けて」（2016年10月29・30日、立命館大学アート・リサーチセンターにて開催）の企画の起点です。また、この企画には、2016年3月スイスのチューリッヒ大学において開催された国際シンポジウム「Katagami in the West 海外での『型紙』の姿」が大きく関わっています。本ワークショップは、シンポジウムを通じて浮かび上がった課題を実践的に検討することも目的としました。

当該ワークショップでは、型紙整理やデータベース化の事例報告、本学におけるデジタル化や整理の方法の実際を紹介しました。また、各所蔵機関における型紙整理の現状や課題を共有することもでき、型紙の調査方法・メタデータ項目の標準化について活発な意見交換をおこないました。加えて、開催日には現在の染織産業に関わる方々のご参加もあり、受け継がれてきた型紙のデザインや技術を現代の産業や一般社会への普及にどのように活用できるのかについても議論され、型紙所蔵機関と産業とのネットワーク構築の場ともなりました。ここに改めて、ご参加くださいました多くの方々に深甚からの感謝の意を表したいとおもいます。

本報告書は、ワークショップにおける報告内容を共有することを目的としてまとめたものです。各所蔵機関の現状や型紙の調査方法、商印など今後の型紙研究の参考になれば幸いです。これからも国際的な型紙研究への一層のご協力とご支援をお願いし、報告書刊行にあたってのごあいさつとさせていただきます。

2017年3月

立命館大学 研究成果国際発信プログラム
「国際的な型紙研究の基盤構築と活用に関する研究」

研究代表者 鈴木桂子

目次

主旨説明

004 「国際的な型紙研究の基盤構築と活用に向けて」 鈴木桂子

基調講演

006 「『道具』から『資料』へ これからの型紙研究へ向けて」 生田ゆき

[第1部] 型紙研究の現在と課題

013 「スイスから見た型紙研究の景色」 Hans Thomsen / ハンス・トムセン

019 「技法や媒体を超えた型紙図案のハイブリディティを考慮する」 高木陽子

020 「ドレスデン州立芸術コレクションのデータベース『ダフネ』—型紙コレクションの組織的科学的調査のための基本ツールと国際的ネットワーク活性化の必要性について」 Kerstin Stöver / ケルスティン・シュテーファー

031 「紅型型紙の調査からデータベース化への方法」 平田美奈子

041 「ボストン美術館とニューイングランド地方における型紙の受容と活用」 堀田結子

型紙サミット発表

046 「甲賀市水口歴史民俗資料館の型紙調査について」 永井晃子

060 「河内長野市立ふるさと歴史学習館（くろまる館）の型紙調査について」 松野准子

070 「型紙調査における反故紙の扱いについて—文字情報からわかること—」 鈴木亜季

[第2部] 型紙の調査・研究—デジタルアーカイブの実践

074 「型紙から読み取れること 型紙調査の有効性」 生田ゆき

082 「型紙データベース構築から活用に向けて」 加茂瑞穂

087 「立命館大学型友禅図案・型紙における修復作業の実践と課題」 木立雅朗・山本真紗子・
枝木妙子

094 「ARC メソッドによる文化資源アーカイブ」 赤間 亮

本報告書の完全版・カラー版は以下で公開しています。

<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/app/news/pc/001188.html>

国際的な型紙研究の基盤構築と活用に向けて

鈴木桂子〈立命館大学 教授〉

近年、型紙に対する学術的な関心が高まり、これに伴い、型紙が世界各地で所蔵されていることが明らかになりつつある。立命館大学アート・リサーチセンターが関係する様々な研究プロジェクトにおいても、型紙は、京都の伝統産業資料として、また近代染織資料として、また歴史的・世界的なプリント・メディア資料として、様々な研究の重要な結節点であると認識されている。その一方で、きもの産業構造の変化とともに型紙の製造に携わる人口の減少や資料の散逸に対して危機感が高まっている。

このような状況の下、型紙の研究者や所蔵機関が連携をとりながら国際的な型紙研究の基盤構築と活用を進めるべき時期を迎えている。本ワークショップは、大量に現存する型紙を整理し、その情報を蓄積・共有、調査・研究するため、(1) 具体的な調査方法、(2) 研究の進め方、(3) データベース化に向けての問題点と課題、及び実践的なノウハウを共有することを目的とする。



国際的な型紙研究の 基盤構築と活用に向けて

2016年10月29日
立命館大学 鈴木桂子

型紙研究の歴史

- 1955年2月、伊勢型紙が持つ高度の技術に対して、6名の職人の方々が重要無形文化財(人間国宝)に指定された。
- 2006年、型紙をテーマとした展覧会がフランス・パリで開催され、国際シンポジウム『型紙とジャポニスム—各地域における展開』が開催。2012年には日本でも『Katagami Style』が開催され、2014年にドイツ、スイスでも開催される。
- 2016年3月、スイス・チューリッヒ大学において国際シンポジウム『Katagami in the West 海外での「型紙」の姿』開催。

国際的な型紙研究の 基盤構築の必要性

型紙

- 海外にも大量に現存することが判明。
- 文字情報が少ない。
- 染色作品との分離。



国際的な型紙の学術研究推進には

- 情報の標準化と共有が必要。
- 国内外の研究者や所蔵機関の連携とデータベース構築とが必要。

国際的な型紙研究の 基盤構築と活用をめざし

本ワークショップは、大量に現存する型紙を整理し、その情報を蓄積・共有、調査・研究するため、

- (1) 具体的な調査方法
- (2) 研究の進め方
- (3) データベース化に向けての課題等

問題点と課題、及び実践的なノウハウを共有することを目的とする。

立命館大学アート・リサーチセンター(ARC) (1998年設立)



本センターは、伝統的な人文学と情報科学を連携させた**デジタル・ヒューマニティーズ**により、日本文化研究を推進することを目的とする。

文化芸術研究資源共有化「ARCモデル」



- 文化資源デジタルアーカイブ技術を持つ
DH型研究者自らの手による全作品デジタルアーカイブ
文化財修復・保存技術
デジタルステルカメラの撮影技術
デジタルファイル大量処理・管理技術
専門分野型データベース構築技術
- 浮世絵をモデルにした所蔵品別デジタルアーカイブ
※浮世絵は欧米の博物館に例外なく所蔵されている
⇒浮世絵以外のジャンルへと展開可能(陶磁器・漆器・根付・型紙など)
- デジタル複製物作成は博物館の切実なニーズ
⇒国境やジャンルを越えた学芸員間ネットワークの有効化・博物館運営の活性化
- 所蔵資料の悉皆調査を実現
⇒若手研究者の原物調査参加による圧倒的な経験蓄積

21世紀版「壁のない博物館・図書館」の実現

『道具』から『資料』へ これからの型紙研究へ向けて

生田ゆき〈三重県立美術館 学芸員〉

型染の道具として発展してきた型紙。多種多彩な文様の妙と、精緻な柄を彫り抜く技術は多くの人々を魅了してきた。特に19世紀後半以降、型紙が大量に欧米に輸出された事実が明らかになるや、型紙に注がれる眼差しは熱を帯びる一方である。

他方、型紙研究には依然として大きな壁が横たわったままである。染色の道具として扱われた時代が長かったために、型紙の生産、注文、流通についての文字情報が圧倒的に不足しているのだ。

この現状を打破するためには、型紙を解読すべき資料として見直す態度が必要となる。それには、型紙についての、加工方法の変遷、彫刻技術の発展、染色技法の差異など、型紙の「現場」に根差した情報だけでなく、特権的株仲間の形成による型紙の独占販売体制という特殊な歴史的経緯についての知識も必要となる。

確かに型紙は従来の美術史的な手法による分析は困難である。翻ってそれは、既成概念を超えて、染色史、服飾史、さらに経済史、外交史などとも連携することにより、新たな学問の地平が開かれる可能性を示唆するものである。本発表では、国内外で行った様々な調査の結果をもとに、これからの型紙研究のあり方を提案していきたい。

『道具』から『資料』へ

これからの型紙研究へ向けて

2016年10月29日（土）
 於：立命館大学衣笠キャンパス アート・リサーチセンター
 生田ゆき（三重県立美術館 学芸員）

『道具』から『資料』へ

これからの型紙研究へ向けて

- ・ 0. はじめに
- ・ 1. 『道具』としての型紙
- ・ 2. 『資料』としての型紙
- ・ 3. 「解説」される型紙
- ・ 4. おわりに これからの型紙研究へ向けて

0. はじめに

- ・ 型紙とは何か
- ・ 型紙のはらむ光、そして影
- ・ 型紙研究の歴史と現状

- ・ 型紙＝型染の道具、型紙の発展＝型染の発展
- ・ 型置き＝ヘラで防染糊（糯米、米糠）を型紙を通して生地にはりつける
- ・ 型染＝「“おくり”の美」
 ※いかにムラなく均一に染め上げることができるかが課題
 防染糊の調合、ヘラの手入れ、型紙の仕上がり（目と口が合うこと）



鹿田正雄氏による三重県立美術館での実演（2009年）



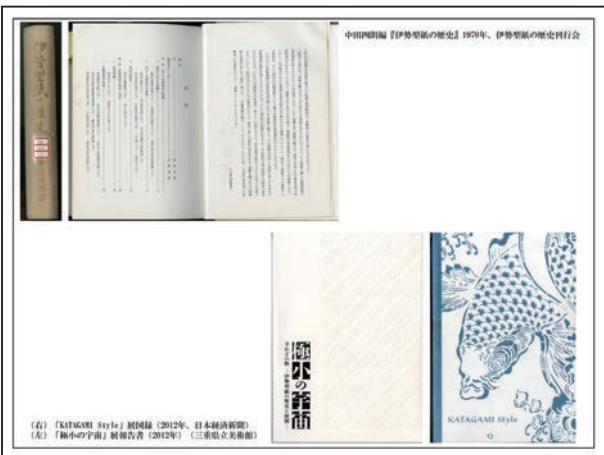
伊勢型紙の技法 染めり（左）、通し染め（右）、通し染め（左）、通し染め（右）
 協力：伊勢型紙技術保存会 撮影：宮川尾雄



『KATAGAMI Style』展
 紹介ページ
 （三重県立美術館HPから）



「KATAGAMI Style」展 展示風景（三重県立美術館、2012年8月28日～10月14日）

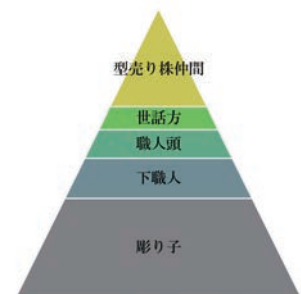


（右）「KATAGAMI Style」展図録（2012年、日本経済新聞）
（左）「伊勢の字紙」展報告書（2012年）（三重県立美術館）

1. 『道具』としての型紙

- ・文様へのあくなき執念
- ・伝統的な型紙産業の構造と分業制
- ・近代と型紙

伝統的な型紙産業の構造と分業制



中田四郎編『伊勢型紙の歴史』1970年、伊勢型紙の歴史刊行会、89頁、209頁。

近代化と型紙

- 明治元年（1868年）
明治維新
明治4年（1871年）
廃藩置県
株仲間廃止されるも、白子・寺家両村の型売り株仲間は黙認の形で存続
明治6年（1873年）
営業自由の原則により、株仲間解散
明治13年（1880年）
この頃、北村治兵衛氏により、型地紙を室で煙焙煙する室入煙焙法が発明
型紙製造販売のための株式会社「龍鳳社」設立（1882年解散）
株仲間の解体。
明治35年（1902年）
白子町立工業徒姉妹学校創立（後の白子工業学校）（夜間/三年制）
白子で「図案研究会」が作られる

「伊勢形紙組合、販売人売り場分区分簿」明治35年（1902年）2月調べ

伊勢形紙組合の売り場分区分簿									
区	地	場	名	姓	名	姓	名	姓	名
第一区	東区・大宮・寺家	伊勢形紙組合	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
			寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
			寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
			寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
第二区	西区・大宮・寺家	伊勢形紙組合	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
			寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
			寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
			寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
第三区	南区・大宮・寺家	伊勢形紙組合	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
			寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
			寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
			寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
第四区	北区・大宮・寺家	伊勢形紙組合	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
			寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
			寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家
			寺家	大宮	寺家	大宮	寺家	大宮	寺家

中田四郎編『伊勢型紙の歴史』1970年、伊勢型紙の歴史刊行会、89頁、135-134頁

2. 『資料』としての型紙

- ・型紙販売商と株仲間
- ・文献資料の欠如という闇

型紙販売商と株仲間

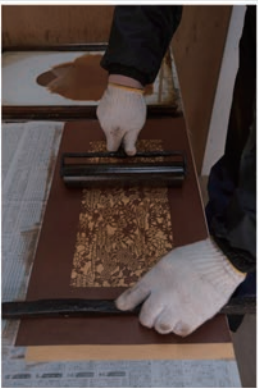
宝暦3年（1753年）8月
型紙販売に関する特権的株仲間の形成
白子・寺家・江島の行商株 139株（後に138株）
文政9年（1826年）正月
江戸型屋は江戸出稼ぎ株仲間として、白子・寺家・江島の株仲間の組織に加入
12株

3. 「解説」される型紙

- ・技法
- ・墨書
- ・商印
- ・その他

未使用の型紙と「上型」

未使用の型紙：防染糊による黒化と硬化を免れる
←墨書、商印の判読性の向上
上型：型紙彫刻の際にこよりでまとめた最上層の型紙
←文様の絵摺の跡
←一般的には、商品として流通しない
←型売り商人の文様の手控え的な意味合い⇒墨書、商印



伊勢型紙の2つの継ぎ技法
（左）糸入れ
（右）砂入れ
撮影：宮川裕雄
協力：伊勢型紙技術保存会

ボストン美術館の型紙調査から

第1次調査：
①2013年10月14日（日）～2013年10月21日（木）
②2014年3月21日（日）～2014年3月27日（木）
（公益財団法人）美術工芸振興財団基金による、平成25年度「美術工芸の調査研究・保存活動」に対する助成）
第2次調査：
③2014年7月13日（日）～2014年7月20日（日）
④2015年1月25日（日）～2015年2月9日（月）
美術館連絡協議会の海外研修派遣事業

ボストン美術館とビッグロー

1880年代、ウィリアム・スタージス・ビッグロー（William Sturgis Bigelow）が同館に型紙を寄贈。（ビッグローは1882年モース、フェノロサに同行して日本を訪問。1890年に同館の理事に就任）

ビッグロー寄贈の型紙コレクションの総数は約4500枚。大半は小紋型と呼ばれる形状の型紙で構成されている。



ボストン美術館での調査の様子（撮影：2013年）

商印からわかること① ポストン美術館の型紙調査から

- ・商印：「江戸（東京）」、「大阪」、「白子（勢州白子）」が大半を占める
 - ・「江戸」と「東京」の商印が混在する理由
- ービダローが寄贈した型紙は、明治維新（1868年）頃に製作されたものを基盤にしていると考えられる。

ービダローは1882年モース、フェノロサに同行して日本を訪問。1890年に同館の理事に就任。

ザンクト・ガレン・テキスタイル博物館の型紙の裏張りの新聞紙名と日付

・都新聞	明治36年（1903年）11月26日
・都新聞	明治37年（1904年）6月3日
・中央新聞	明治37年（1904年）2月23日
・東京朝日新聞	明治37年（1904年）5月31日
・時事新報	明治38年（1905年）4月1日

トレチャコフ美術館の型紙の裏張りの新聞紙名と日付

・都新聞	明治37年（1904年）7月10日
・都新聞	明治37年（1904年）9月21日
・中央新聞	明治38年（1905年）6月26日
・時事新報	明治38年（1905年）5月26日
・時事新報	明治38年（1905年）5月25日
・東京日日新聞号外	明治40年（1907年）4月14日
・報知新聞	明治38年（1905年）11月11日

4. おわりに これからの型紙研究へ向けて

- ・日本の伝統工芸品から世界の研究資料へ
- ・日本工芸史、染色史、だけでなく、服飾史、産業史との関連
- ・郷土資料としての型紙→地方史
- ・海外流出の経緯の糸口の解明→外交史、経済史
- ・型紙＝ネットワーク

『道具』から『資料』へ これからの型紙研究へ向けて

2016年10月29日(土)

於: 立命館大学衣笠キャンパス アート・リサーチセンター

生田ゆき (三重県立美術館 学芸員)

0. はじめに
 1. 『道具』としての型紙
 2. 『資料』としての型紙
 3. 「解説」される型紙
 4. おわりに これからの型紙研究へ向けて
-

0. はじめに
 - ・型紙とは何か
 - ・型紙のはらむ光、そして影
 - ・型紙研究の歴史と現状
 - ・型紙とは何か
1. 『道具』としての型紙
 - ・文様へのあくなき執念
 - ・伝統的な型紙産業の構造と分業制
 - ・近代と型紙

近代化と型紙

- | | |
|--------------|---|
| 明治元年(1868年) | 明治維新 |
| 明治4年(1871年) | 廃藩置県。株仲間は廃止されるも、白子・寺家両村の型売り株仲間は黙認の形で存続。 |
| 明治6年(1873年) | 営業自由の原則により、株仲間解散。 |
| 明治13年(1880年) | この頃、北村治兵衛氏により、型地紙を室で煙焙煙する室入煙焙が発明。
型紙製造販売のための株式組織「竈販社」設立(1882年解散)。
株仲間の解体。 |
| 明治35年(1902年) | 白子町立工業徒弟学校創立(後の白子工業学校)(夜間/三年制)。
白子で「図案研究会」が作られる。 |

2. 『資料』としての型紙
 - ・型紙販売商と株仲間
 - ・文献資料の欠如という闇

型紙販売商と株仲間

- | | |
|---------------|--|
| 宝暦3年(1753年)8月 | 型紙販売に関する特権的株仲間の形成
白子・寺家・江島の行商株 139株(後に138株) |
| 文政9年(1826年)正月 | 江戸型屋は江戸出稼ぎ株仲間として、白子・寺家・江島の株仲間の組織に加入 12株 |

3. 「解説」される型紙

- ・技法
- ・墨書
- ・商印
- ・その他

ボストン美術館の型紙調査から

ボストン美術館とビゲロー

1880年代、ウィリアム・スタージス・ビゲロー（William Sturgis Bigelow）が同館に型紙を寄贈。（ビゲローは1882年モース、フェノロサに同行して日本を訪問。1890年に同館の理事に就任）

ビゲロー寄贈の型紙コレクションの総数は約4500枚。大半は小紋型と呼ばれる形状の型紙で構成されている。

商印からわかること

- ・商印：「江戸（東京）」、「大坂」、「白子（勢州白子）」が大半を占める→白子地方は、幕藩体制崩壊後の明治時代になっても、型紙流通において大きな力を持っていたことが明らかとなる。
- ・「江戸」と「東京」の商印が混在する理由 →ビゲローが寄贈した型紙は、明治維新（1868年）頃に製作されたものを基盤にしていると考えられる。
- ・「大坂」の地名が含まれた商印→ビゲローの型紙コレクションは、大坂地方との関係があることが想定される。

4. おわりに これからの型紙研究へ向けて

- ・日本の伝統工芸品から世界の研究資料へ
 - ・日本工芸史、染色史、だけでなく、服飾史、産業史との関連
 - ・郷土資料としての型紙→地方史
 - ・海外流出の経緯の糸口の解明→外交史、経済史
-
- ・型紙＝ネットワーク

スイスから見た型紙研究の景色

Hans Thomsen ハンス・トムセン〈チューリッヒ大学 教授〉

2016年3月にスイスで行われた国際学会『海外での「型紙」の姿』には大勢の型紙関係の専門家が集まり、二日間の発表と一日の見学を通して、これまでの型紙研究と型紙コレクションの現状がある程度、明らかになった。海外の数多くの型紙コレクションには共通の問題点が幾つかある。たとえば、保管、保存、修理の問題である。または模様の名付けや番号の付け方、撮影の方法、データベースの作り方、展示の方法、調査の種類や型紙の測り方、型紙研究に関する調査道具の選び方などにも問題があることが明らかになった。

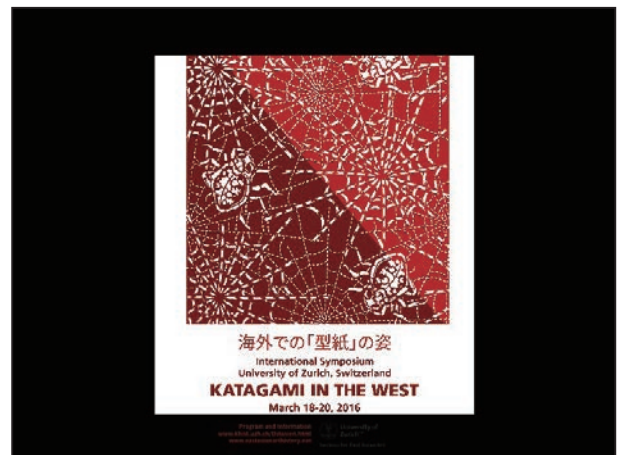
これら諸問題を解決するためにまず必要なのが、コミュニケーションである。型紙自体の形や大きさはさほど変わらないことを勘案すると、型紙についての新提案、調査方法、道具や展示の情報、コレクションの新発見などを型紙の研究者間で情報交換・共有する時代になれば、型紙研究が発展する。インターネットを利用して、世界中のさまざまな場所に存在しているコレクションを繋ぐと比較研究も簡単に出来る。またインターネットを通してのネットワークが型紙を繋ぐ道具だけではなく、学者を繋ぐものにもなる。

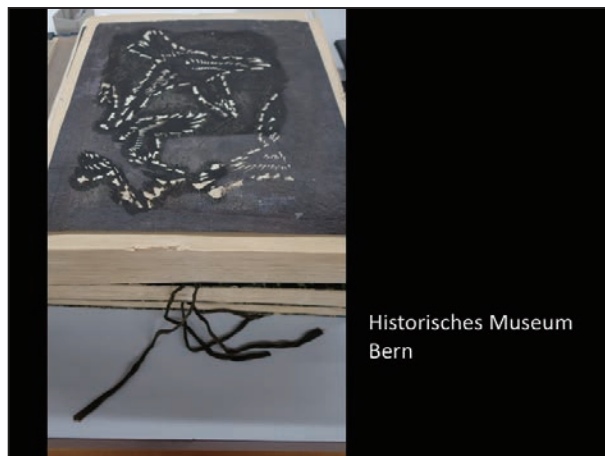
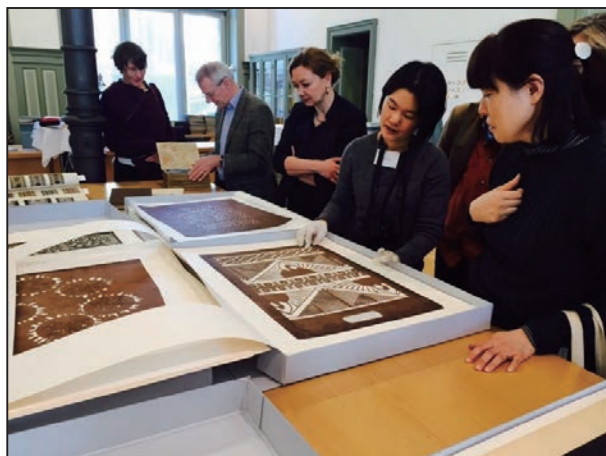
型紙コレクションには共通点が多々あるが、大きな違いもある。スイスに数多くある型紙コレクションを研究したところ、収集された元々の目的が、以下のように判明した。

- 1) デザインの教材。型紙を学校の教材として、生徒にデザインを教える。ザンクトガレンの染織学校のコレクションがこれに該当する（現在はザンクトガレン・テキスタイル美術館蔵）。
- 2) 美術品。美術品として集められたコレクションである。このような例として、フランス人の日本美術収集家アンリ・ヴェヴェールの型紙コレクションがある（現在はザンクトガレン・歴史民族博物館蔵）。
- 3) 企業発達への道具。会社が新しい技術や商品を生み出すために、型紙を参考資料として集める。アーラウ州資料館の一万点コレクションがこの典型である。
- 4) 人類学。世界の他民族を理解するために集められた道具。型紙を通して「日本人」を研究する。チューリッヒ大学民族博物館のコレクションがこの典型である。
- 5) 日本の文化。美術品ではなく、日本文化を説明する為に使用された。リートベルグ美術館がこの例に典型である。型紙コレクションは美術館の付属図書館に所蔵されている。

- 6) 染織研究。染織の生産を理解するため集められたコレクションである。バーゼル民族博物館がこの典型である。ここでは型紙だけではなく、型紙を参考にして作られたテキスタイルも保管されている。

これらコレクションを一つ一つ見るより、総合すると判明することもある。ネットワークとして研究すれば、良い結果が出る。「日本の型紙」か「スイスの型紙」として考えるよりも「国際的な型紙」として考える時代が来たと思う。日本は生産地なので、日本でしか研究ができない面も沢山ある。しかし、海外にしか出て来ない現象もある。国内外を両方見つめれば、研究がより深く面白くなる。これからも型紙の研究に期待をしている。





- Necessary

Conservation – first and foremost
Internet and digitalizing objects
Connecting the collections and scholars
Rethinking the terms:
tool, artisan work, art, resource

Swiss receptions can be grouped:

Design, teaching tools:
St Gallen Textilmuseum

Design, collecting
HVMSG

Industrial concept:
Aarau

Anthropology:
Anthropological Museum, University of Zurich

Describing Japan's culture:
Rietberg and Neuchatel

And Basel?



バーゼル 民族博物館 Museum der Kulturen, Basel

Basel Museum der Kulturen



18'000 Objects related to textiles and textile techniques

230 Objects related to Japanese textile techniques

11 Bingata Kimono

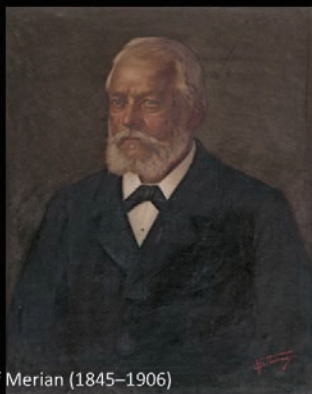
Ca. 180 katagami (?)

Many pieces arrived via Jaap Langwies during 1956 und 1964
through Alfred Bühler (1900 – 1981)

190 Katagami donated between 1873 und 1883
from Johann Rudolf Merian



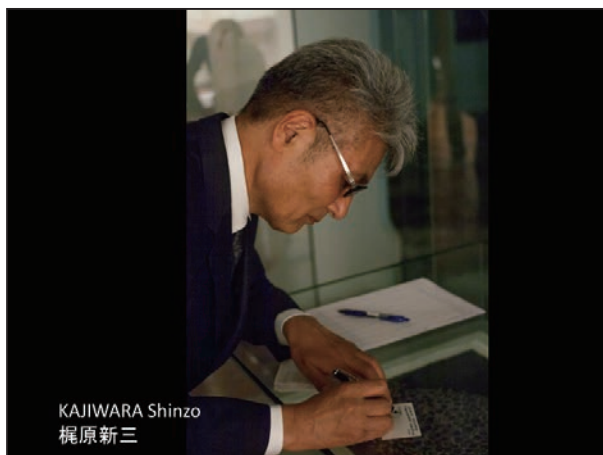
Katagami, Ild 197.82, Museum der Kulturen Basel



Johann Rudolf Merian (1845–1906)

バーゼルでは





- Japanese Katagami
- Swiss Katagami
- International Katagami

Thank you for your
attention!



海外での「型紙」の姿
International Symposium
University of Zurich, Switzerland
KATAGAMI IN THE WEST
March 18-20, 2016

技法や媒体を超えた型紙図案の ハイブリディティを考慮する

高木陽子〈文化学園大学 教授〉

型紙の図案は、技法や媒体を超えてハイブリッドの造形を作ってきた。本発表では、近代デザインの創始者の一人アンリ・ヴァン・ド・ヴェルド（Henry van de Velde, 1863-1957）をとりあげ、19世紀末から20世紀初めにかけて型紙とバティックに同様の意匠を発見し、平面デザインに応用していた例を示す。

この問題は、長期のスパンで地球を循環するがごとく受容・応用されてきた染織の図案研究と、そのスピードが飛躍的に早まる近代デザイン研究にまたがり、美術史、デザイン史、染織史、経済史、人類学、グローバルヒストリーなどの観点から研究できる。

発表者は、西欧のジャポニズムの観点からヴァン・ド・ヴェルド研究をおこない、この問題にたどり着き、バティックを専門とする人類学者と出会い、研究上の意見交換を行っている。型紙データベースの参照欄に、ある型紙図案が、他技法による染織や他の媒体に応用された例を掲載することで、思いがけない学際的な共同研究が生まれる可能性がある。

ドレスデン州立芸術コレクションのデータベース『ダフネ』 —型紙コレクションの組織的科学的調査のための基本 ツールと国際的ネットワーク活性化の必要性について

Kerstin Stöver ケルスティン・シュテーファー〈ドレスデン工芸博物館 学芸員〉

ドレスデン工芸博物館のテキスタイル所蔵品目録には、「目録番号 21940」のところに、「日本製の染色用型紙コレクション、約 12,000 点」と記されている。

そして実際に、博物館の収蔵庫には、目録番号が記された型紙が収められた 94 の保存ケースと、「超大型」の型紙が入ったポートフォリオ 1 点が存在する。それらは、1889 年に、ベルリンの著名な美術商ヘルマン・ベヒター (Hermann Pächter) が経営する画廊 R・ヴァーグナー (R. Wagner) を通じて購入されたものだと考えられてきた。

これら貴重なコレクションの価値を自覚しつつも、100 年以上ものあいだ、ドレスデン工芸博物館は、このユニークな作品群を包括的かつ科学的に研究したり展示したりすることができるスタッフを得る機会に恵まれなかった。しかし、個々の型紙に顔料を塗ったような跡があることから、それらが (工芸博物館に附属していた) 工芸学校の授業で使われていたことがわかる。

2013 年には、しかし、「博物館&調査財団 (Museum & Research Foundation)」からの財政支援によって、展覧会プロジェクト「収蔵庫への調査旅行」の一環として、所蔵する型紙の包括的な調査研究を行う大きな機会がもたらされた。

このプロジェクトのために雇用された 3 人のスタッフが、一年間にわたって、全ての型紙の寸法や特徴などを記録し、撮影を行って、それらをドレスデン州立芸術コレクション (SKD - Staatliche Kunstsammlungen Dresden) のデジタル・データベース・プログラム「ダフネ」に登録していった。その数は、型紙 16,000 枚以上にものぼる。それらは、このコレクションに関心をもつ世界中の人々が見ることが出来るように、SKD のウェブサイトで漸次公開されていく予定である。同様に、型紙の修復事業も始まった。

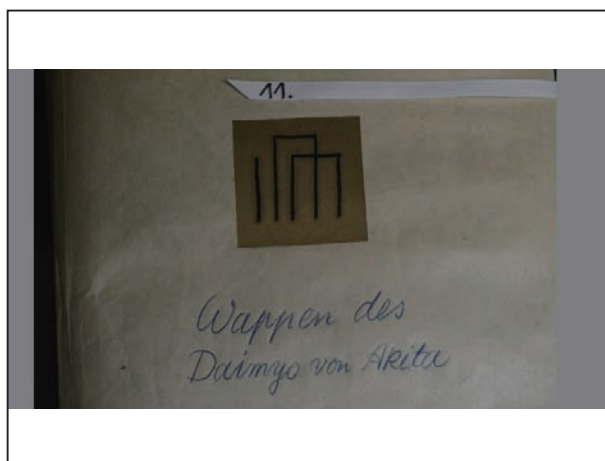
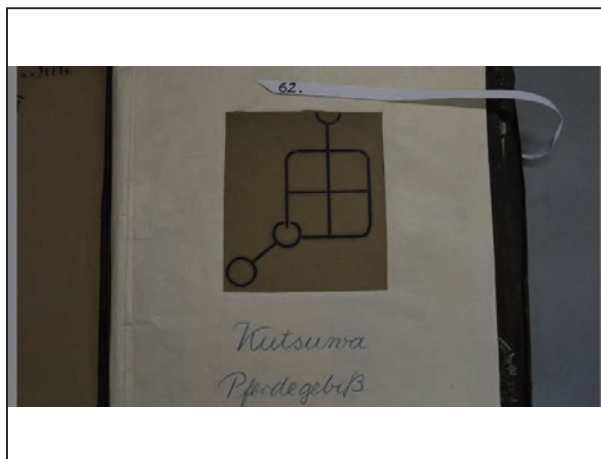
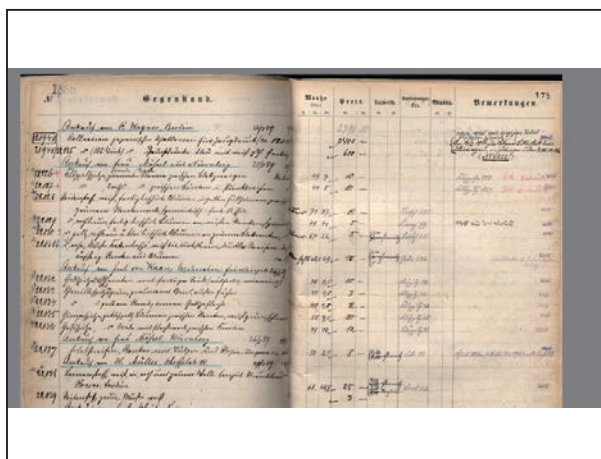
コレクションの記録作業によって、コレクション全体の体系的かつ科学的調査は始まったばかりであり、様々な疑問点が指摘されるようになった。同時に、SKD 所属の他機関、例えばドレスデン銅版画室 (Kupferstichkabinett) が所蔵する小規模な型紙コレクションとの比較も行われつつある。

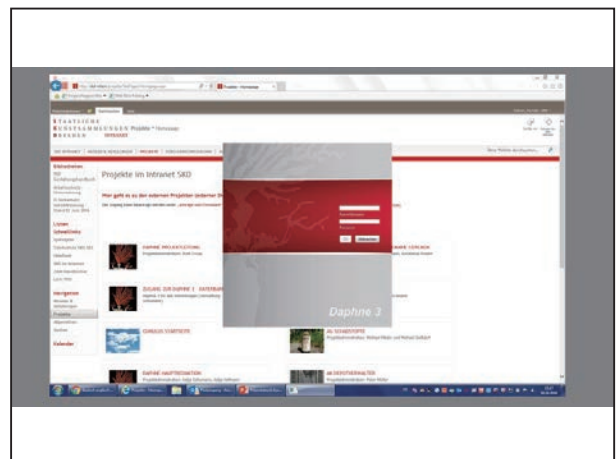
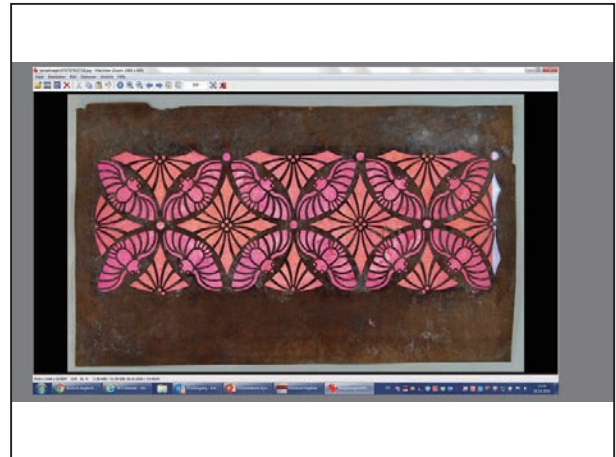
現時点で大きな発見はそれほど多くはない。調査はまだ完了しておらず、パズルを解き明かすた

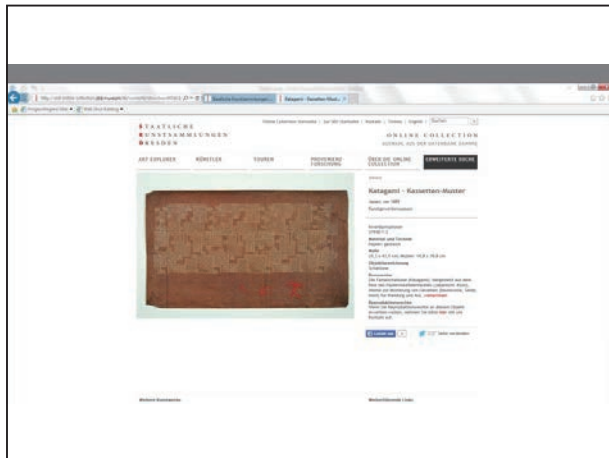
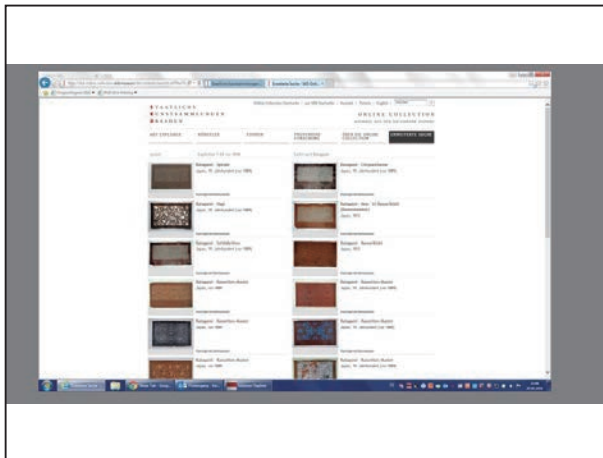
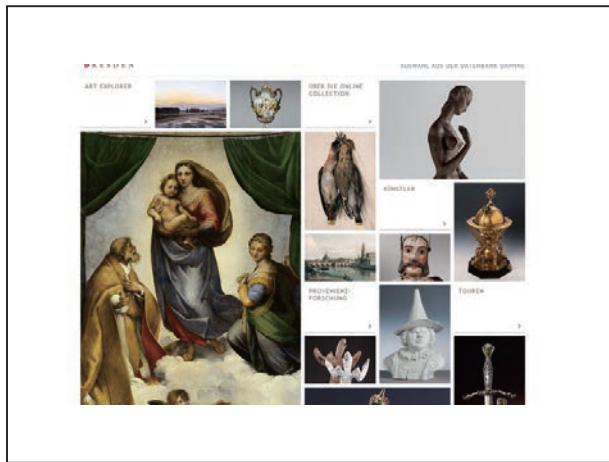
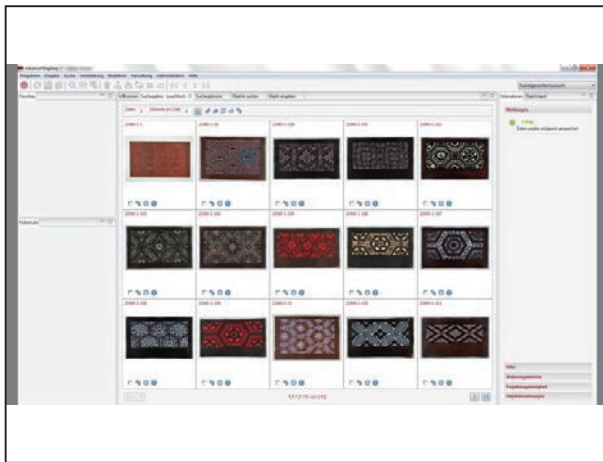
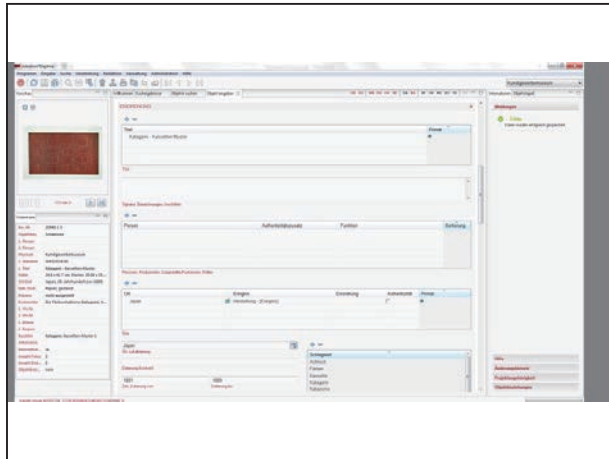
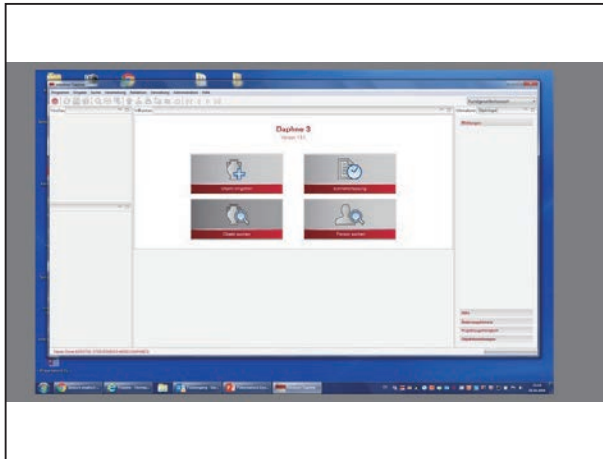
めの疑問の多くには、いまだ解答が得られていない。しかしながら、本発表においては、すでに得られたいくつかの成果を報告する。

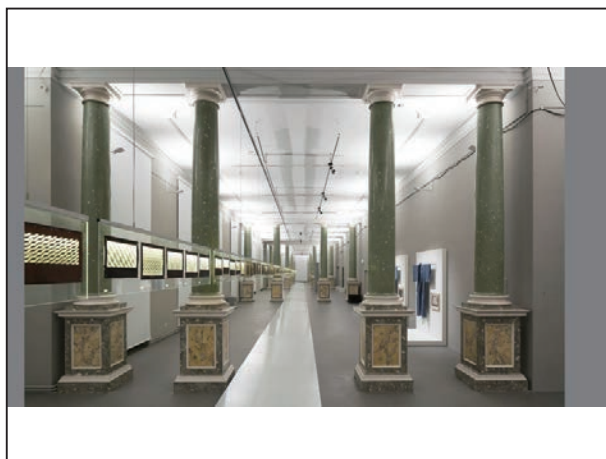
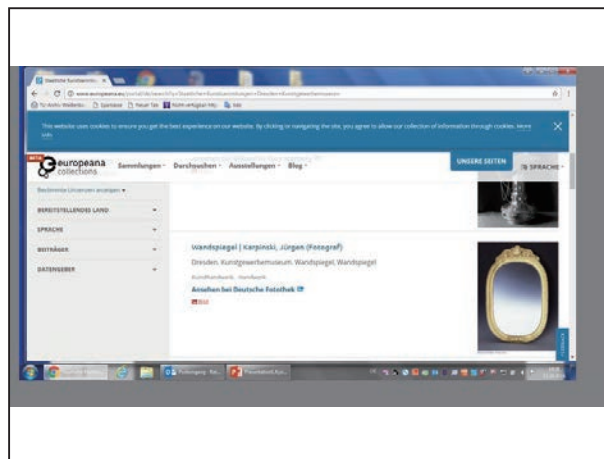
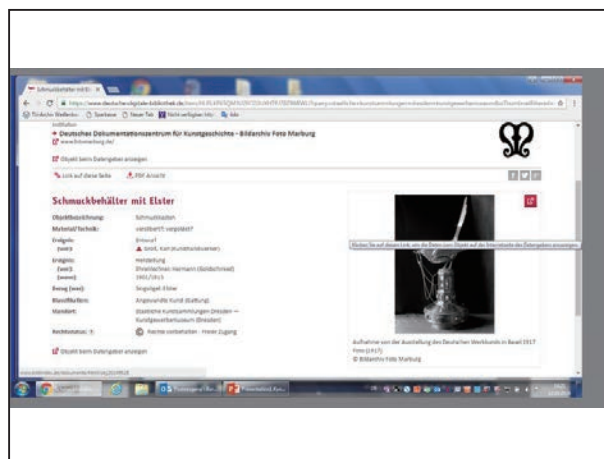
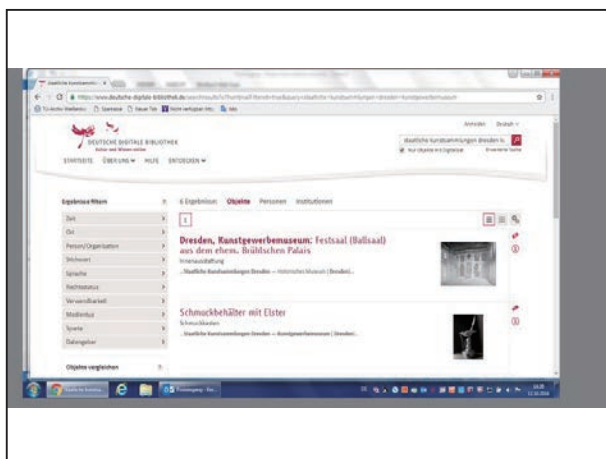
現在、ダフネ・データベース内で行われている作業は、近いうちに、「ユーロピアーナ (EUROPEANA)」のような外部データベース・エンジンに接続・拡張される予定である。その前提条件として、(コレクションの) メタ・データの入手は必須だと言えよう。

和訳：池田祐子〈京都国立近代美術館 主任研究員〉









Ladies and Gentlemen,

Thank you very much for inviting me to Kyoto and giving me the opportunity of taking part in this symposium.

I unfortunately didn't have the opportunity in Zurich in March this year of presenting the katagami collection of the Dresden Museum of Decorative Arts, so I would like to make up for this in the first part of my lecture.

In March 1889, the Dresden Museum of Decorative Arts purchased a great number of katagamis from the art-dealing firm of R. Wagner, whose proprietor at the time was the famous Hermann Pächter. The following entry is written in the inventory of textiles of the Dresden Museum of Decorative Arts as No. 21940: *Collection Japanischer Schablonen für Zeugdruck. Ca. 12,000 Stück* (Collection of Japanese Stencils for Fabric Printing. Approximately 12, 000 items).

And in fact, 94 boxes and a portfolio with "extra-large" examples of the registered katagami are kept in the museum's textile depot.

We no longer have any documents about the purchase, for example deals about the quantity of the stencils or ideas about price. The only fact we are sure of is that the administrative structure of the time required the director of the Museum of Decorative Arts to have the purchase approved by the Saxon Ministry of the Interior – since this was the authority that managed the finances. The museum director, by the way, was simultaneously director of the affiliated School of Applied Arts. The reason behind the wish to purchase the katagami would be of great interest today; after all, 2,400 marks were made available, a horrendous sum of money for the time. It is remarkable from today's point of view that in the following years it wasn't considered worthy of making any note whatever of this enormous inventory in the museum records. The Museum of Decorative Arts held around 8 to 10 exhibitions every year on very precise themes, among them presentations with East Asian handicrafts: bronzes, textiles, woodcuts, etc.; but there is no mention of dyer's stencils. However, vestiges of paint on some of the stencils prove they were used in the everyday curriculum of the students. It is also probable that like other holdings of the museum the stencils provided viewing material and source of inspiration for designers and artists working for firms in Saxony. Examples of this were on show in 2012 among other things in the exhibition *Katagami Style*, alongside objects from the Hellerau Werkstätten workshops.

A scientific study and processing of the inventory did not take place. One reason for this was surely that throughout its entire history the Museum of Decorative Arts never availed of a specialist on East Asia. In addition, this huge number of katagami overtaxed the museum's staff capacities. Hence, for

over a century, each specialist working in the museum remained aware of this inventory, but it was a buried treasure.

Each new museum director, and also each new general director of the Dresden State Art Collections marvelled at this treasure, but didn't see any possibilities in terms either of personnel or finances of making it accessible to the public.

Things changed only in 2013, when the Museum & Research Foundation at last provided the necessary financial means, an action which also included developing the exhibition format "Research Trips into the Depot".

The Museum of Decorative Arts was given the opportunity of employing three young specialists for one year. Their task was to register, measure, describe and photograph all the preserved katagami in the SKD's own database, called Daphne (SKD is the acronym for the Dresden State Art Collections, Staatliche Kunstsammlungen Dresden). This was a job that delighted the participants – as you can see on this photo – but it was also a great challenge, since all three (two art historians and a historian) set to work without any concrete specialist knowledge, armed only with their curiosity, their thirst for knowledge and their ambition. At this point already I would like to thank Yuko Ikeda and Yuki Ikuta for their quick and uncomplicated help during their time working in the Dresden Museum of Decorative Arts. The visits yielded a lively exchange of knowledge sharing, which was an enormous help for the three scientists, above all as regards the clarification of terms, inscriptions and stamps etc. on the individual stencils. These contacts also form the basis for the ongoing katagami project. But I'm broaching on this too soon, more of it later!

Registering all the katagami kept in the Museum of Decorative Arts resulted in the handsome total of 16,213 – rather different from the approximately 12,000 items in the inventory register. Furthermore, there are another 288 katagami preserved in the Museum of Prints and Drawings, the Kupferstichkabinett, which likewise belonged historically to this batch. How can we explain this? With the help of all the information registered in the database we were able to embark on intensive research into the SKD's archives, also into the almanacs of the School of Applied Arts, of the library and of the museum. The first results were astounding: besides the dyer's stencils acquired in 1889, the Library of Decorative Arts affiliated to the museum received another 15,500 katagami in 1914 from Hans von Weissenbach, the Leipzig lawyer and passionate model collector for the decorative arts. We can read in a printed list of 1899 that the collector, painstakingly with his own hands, lined them with variously coloured tissue paper in order to stabilise the fragile sheets. This meant that in 1914 there weren't 12,000 katagami belonging to the holdings of the Museum of Decorative Arts and its library, but 27,500 katagami. This actually means that all stencils today that are lined with tissue paper in the inventory of the Museum of Decorative Arts and the Museum of Prints and Drawings

derive from the 'von Weissenbach' collection. This is verified as well by handwritten notes on several sheets, which can be provenly ascribed to von Weissenbach. All the sheets that have not been lined – a comparatively low quantity – belong to the batch originally acquired in 1889.

But what happened to it? Unconfirmed oral information from the post-war period included reports about some sort of looting of the holdings that were still in the building of the Museum of Decorative Arts. Two events lend a certain credibility to these reports. At the end of 2015, the Museum of Decorative Arts received a telephone call from a retired professor of the Dresden Academy of Fine Arts. He had been given a box containing 94 katagami by his former art professor shortly before his death. The latter stated that in the 1940s he had saved them from being burned on the grounds of the Museum of Decorative Arts. In the following years he didn't find an opportunity that wouldn't compromise him to return the box to the museum. All these sheets are not lined and thus belong to the R. Wagner collection.

In spring this year the Museum of Prints and Drawings received an anonymous parcel with — katagami (lined and unlined), also several Japanese woodcuts, which had hitherto been thought lost in the war.

This means that in the worst case the dyer's stencils still missing from the R. Wagner collection were destroyed through vandalism of different kinds. But perhaps there are various batches that are still in private collections. So let's hope that we need only provide some kind of impetus to animate the present owners to return them!

The history of this collection demonstrates at first hand how important the general public is for the objects – which leads me to the second part of my lecture. The importance of the general public applies not only to the opportunity of internationally networking all katagami inventories – it also applies to the scientific tasks in the closer work environment of a museum consortium, or in visualising this work for the general public.

Igor Jenzen is the director of the Saxon Folk Art Museum and important co-developer of the initial phase of the Daphne project, the start of the museum database. He titles it with a quote from the popular Dresden author Erich Kästner, "Es gibt nichts Gutes, außer man tut es" – "There is nothing good unless you do it",

In 2002 the directors' conference of the Dresden State Art Collections resolved to introduce a unified database for all institutions in the museum consortium – so to speak, the creation of a digital general inventory. Five of the twelve institutions were already working in-house with different databases. But there were also sceptics in each museum and in all staff departments. The challenge was daunting.

The holdings in the individual museums were extremely heterogeneous and of different dimensions:

the Grünes Gewölbe – the Green Vault – with around 5,000 objects, then on the other hand the Museum of Prints and Drawings, the Kupferstichkabinett with around 550,000 works. The task in hand involved finding the overlapping data that could be used by everyone. Also the overall quantity of more than one and a half million objects in the Museum of Decorative Arts required the definition of several basic principles of work economy.

During the run-up phase it was necessary in view of the sheer mass of objects to integrate the individual museums with their special expertise based on their type of work: academic specialists and scientific researchers, restorers and conservators, depot managers.

Museum databases already available on the market proved to be insufficient for the requirements of the SKD, so the museum looked for its own software developers and found them in the firm of Robotron. *By the way, for your information I'd like to add that several brochures of the Robotron company are available here with more details.*

Nevertheless, the concurrency of development and alpha use of a database has two sides. On the one hand, each museum is represented by a staff member in the editorial board; they thus have the chance of introducing their individual ideas and wishes about a database; on the other hand, each detail has to be compatible in the end with the ideas of the other museums. Apart from this, the users' patience after program start was sorely but unavoidably tested because of programming errors, also because of constant additions, supplements and optimisations.

One of the most severe problems was the contradiction between a standard, generally valid vocabulary and the accumulated historical terminologies. Solutions could be found by linking up with national – and now international – standard files (PND = Personennormdatei – German Authority File for person data; SWD = Schlagwortnormdatei – Subject Headings Authority File). Despite this, the standardisation of terms continues to be a great challenge. Today, the Daphne database is a mixture of standard fields, their content being chosen from search fields, and freely designed fields.

The database has been operating since 2006. The name is inspired by the metamorphosis of the nymph Daphne in Greek mythology: the female divinity in human form is metamorphosed into a laurel branch – the database translates/transforms analogue objects into digital data.

The general registration of object data in the individual museums began in 2008. Meanwhile, the database has in fact grown to be an all-embracing administrative project for the restoration department, loan procedures, and other administrative tasks. A great challenge will be the constant, continual and concentrated maintenance of the database after completion of the actual registration project. There is also the question of adaptation to the special financial grants hitherto made available for it by the Free State of Saxony.

Up until now however we have already experienced within the museum consortium that the database is a splendid tool for scientific management and knowledge-sharing between all the institutions. The transparency of the holdings in the individual museums enabled gaps to be closed in provenance research and detected supposed war losses; moreover, it also opened up approaches for new research projects.

Online Collection

The aim of Daphne – right from the start it was an inventorying project, placing the holdings of all collections of the Dresden State Art Collections online and thus making them accessible to an expert public as well as potential visitors and all interested parties. Part of the inventory has been shown online since 2011 in the so-called online collection within the SKD website. New data sets are added almost daily. On display are the basic data about a specific objects and – apart from the numismatic collection – a photo.

Another declared aim is to enable data export from the Daphne database to other databases.

Prerequisite for this is the availability of the necessary metadata.

First and foremost however, this autumn there will be the change from the aforementioned PND and SWD standard files (German Authority File for person data; and Subject Headings Authority File) to the Integrated Authority File (GND) of the German National Library. The GND is a standard file for persons, corporations and bodies, conferences, geographical data, headings and work titles. It is used especially for cataloguing literature in libraries, but it also increasingly benefits archives, museums, projects and web/Internet applications.

For a good ten years now the CIDOC, the International Committee for Documentation, has been striving for and pooling the international standardisation of cultural information. So to speak as a pilot project, the SKD, together with its software partner Robotron, has been working under this umbrella of the CIDOC on the prerequisites for data exporting to databases like the German Digital Library and Europeana.

To conclude, I would briefly like to mention the prospects awaiting further research on the katagami collection in the Museum of Decorative Arts. In September, the museum received confirmation from the Japan Foundation of the provision of financial support. This will enable Yuki Ikuta to investigate the katagami inventory for dealers' stamps, and to document and identify these stamps. The results are fed into the database and can then be accessed online.

Thank you for your attention; I would now be very happy to answer any questions you may have.

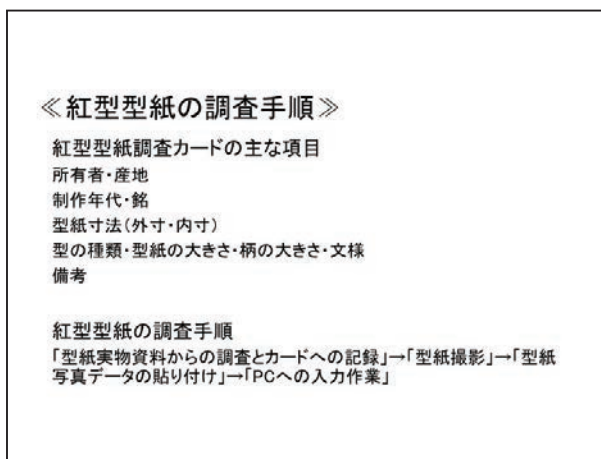
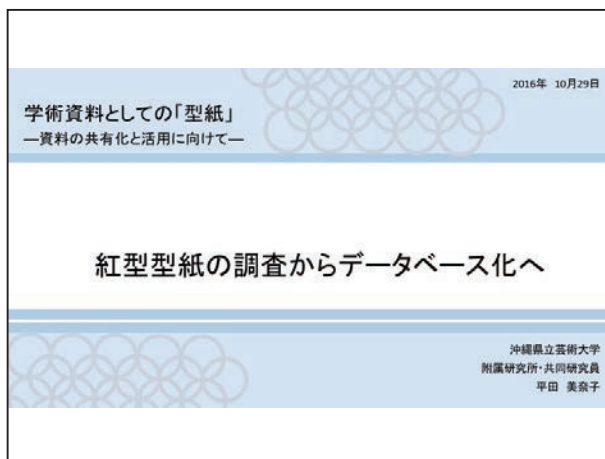
紅型型紙の調査からデータベース化への方法

平田美奈子〈沖縄県立芸術大学 附属研究所 共同研究員〉

染色における「型紙」の役割は、模様を付けるための「道具」である。琉球王朝の時代から受け継がれている紅型染めでも主に衣裳へ模様を付けるため、同様に型紙が用いられている。「型紙」は「道具」であるため、文献や資料が少ない。そのため、型紙整理の基礎となる情報や分類方法について、先行事例が乏しく、具体的な項目を挙げてまとめることが困難であった。

沖縄県立芸術大学では、収蔵されている鎌倉芳太郎資料の紅型型紙を資料としてデータベース化を行ってきた。型紙のサイズによる整理から始まり、全体像の把握のため、調査・データの収集を行い、それらをもとに紅型型紙データベースを作成した。現在でも、データ構築は引き続き行っている状況である。

発表者は、これまでの紅型型紙のデータベース化への成果と反省点を踏まえ、今回のワークショップのテーマである「型紙資料の活用」に向けて提案が出来ればと考える。



作業方法

「型紙実物資料」
・調査カードへの記録

・型紙撮影
専用のガラスケースに挿み撮影

「データベースの作成」

・「画像データ」への入力
調査カードからの入力
撮影した型紙の画像データの貼り付け作業

データベースへの追加項目

・分類コードの確立
・文様・型紙画像
・赤外線画像



同じ模様・同じ模様構成を持つ
型紙数種の検索



複数枚を一組とする大柄の型紙



主となる模様と地模様を
組み合わせた型紙



データベース化への成果と反省点 1

「備考欄」への記録

・調査方法
段階的に調査内容の振り返りをし、見直しを行う
項目付け作業
備考欄の記録から共通性を見出し、分類方法・特徴を決定

・結果・成果
紅型調査で改めてクローズアップされた、技法・型紙制作の
方法からの可能性

データベース化への成果と反省点 2

情報の収集時期

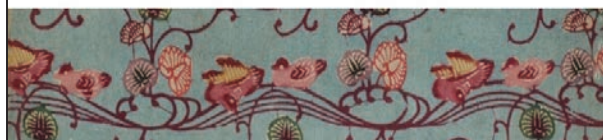
- ・調査の分割
 - 実物資料にのみ知り得る情報
 - 画像データ化内で出来る調査

・結論

- 項目を意識した撮影方法
 - 項目の約半分は画像データでの確認が可能

まとめ

調査を終えて



2016 年 10 月 29 日

学術資料としての「型紙」—資料の共有化と活用に向けて—

「紅型型紙の調査からデータベース化へ」

沖縄県立芸術大学

附属研究所・共同研究員

平田 美奈子

《発表の流れ》

紅型型紙の整理方法と提案

1 紅型型紙整理について

2 紅型型紙整理の方法・内容

3 まとめ

型紙整理を終えて 反省点・見直しから分かったこと

型紙資料の活用に向けての提案

《紅型型紙の概要》

紅型の背景

元来、王族・士族階級の衣裳制作により発展。

諸外国との交流・貿易で、紅型の祖型となる染物技術が入ってきた。

様々な模様のモチーフや、色材・生地を使用し、琉球独特の世界観を華やかに染め出す。

型紙について

・「紅型」の模様を付けるための方法

連続模様に適し、各サイズ・様々な表現方法で模様を作り出す「型紙」・・・衣装用

大柄でダイナミックな「筒描き」の技法・・・舞台幕や風呂敷用

・紅型染めの種類

多色染めの「紅型」

藍単色を濃淡で染めた「藍型」

「紅型の型紙」と「本土の型紙」との共通点と相違点

・共通点

制作方法 型地紙に模様を彫り抜く

使用方法 型紙で布に模様を付けていく

・相違点

日本本土の型紙	商品として特化した型紙制作
紅型の型紙	全行程一貫した紅型制作のため、仕上がりを意識した型紙制作

《紅型型紙の調査手順》

「型紙実物資料からの調査とカードへの記録」→「型紙撮影」→「型紙写真データの貼り付け」→「PC への入力作業」

《紅型型紙調査カードの主な項目》

所有者・産地・制作年代・銘・型紙寸法（外寸・内寸）

型の種類・型紙の大きさ・柄の大きさ・文様・備考

「実物資料」の調査から「型紙データベース」へ

・型紙実物資料	調査カード項目に沿った調査・記録
・撮影	専用のガラスケースを使用した撮影
・データベースの制作	調査カードからの入力と、再度見直し

《データベースの活用法》

・データベースの特徴	キーワードの「検索」から関連する資料を選択
・データベース化の方法	文字記録と画像データ

《「型紙資料の活用」の提案》

紅型型紙の調査方法と反省点

「備考欄」への記録方法 共通して現れる型紙内の特徴を記録

- ・反省点
 - 項目・キーワード決定のための再度見直しのため時間と労力を使用
- ・結果・成果
 - 紅型調査で改めてクローズアップされた技法・型紙制作の方法からの可能性の確認
- ・調査方法
 - 段階的に調査内容の振り返りをし、見直しを行う
 - 項目付け作業のタイミグ
 - 備考欄の記録から共通性を見出し、分類方法・特徴を決定

情報の収集時期

- ・調査の分割 「実物資料にのみ知り得る情報」と「画像データ化内で出来る調査」

《まとめ》

「紅型型紙の調査からデータベース化へ」

＊パワーポイント原稿（スライド数 14 枚）

【1】

沖縄の伝統染色である紅型の中には、型紙を使用して模様を付ける技法がある。その紅型型紙を資料として行った調査研究からデータベースの作成までと、その成果と反省点をまとめる。

《紅型について》

【2】紅型はもともと王族・士族クラスの衣裳として作られる中で技術が発展した染物で、主に晴れ着や礼服として着用されてきた。紅型衣裳には、琉球では目にすることのない様々な模様のモチーフや輸入による特別な色材・生地を使用するなど、琉球独特の世界感が華やかに染め出されている。

【3】紅型には、模様を付ける方法が二種類ある。一つは、連続模様に適した型紙を使用した「型染め」で、大柄から細かい小紋までの各サイズ・種類の模様を付けることができる。このような型紙を使用した型染め技法は主に衣装に使用される。もう一方は「筒描き」による技法で、筒の先から防染糊を絞り出し模様を描くように引いて付ける。型紙とは異なりダイナミックに仕上がるこの技法は、風呂敷や舞台幕用に使用される。このように紅型染めは、用途によって技法が異なる。つまり型紙を使用して模様が付けられた紅型染めは、衣裳の形態となる。

【4】その配色方法は、雰囲気異なる二種類の紅型に分けることができる。紅型の特徴ともいえる華やかな多色染めの「紅型」と、それに対比するような印象の藍の濃淡で染めあげた「藍型」である。この二種類の紅型は、多色か単色か配色の数が異なるだけで、それぞれに専用の型紙があるのではない。あくまでも紅型の型紙は模様を布に付ける道具に徹している。つまり型友禅や和更紗のような、色数分の型紙が必要な摺り込み捺染は行わない。また、重ねて型置きすることによって模様ができる、「追っかけ型」のような模様を分割した型紙もない。

《本土の型紙と紅型の型紙》

【5】「型紙」と一言と言っても、厳密には紅型の型紙と本土の型紙とは共通点と相違点がある。共通点は、布に「模様を付けるための道具」という点である。また型地紙に模様を彫り抜く製作の方法にも共通点がある。相違点でいうと、紅型は一貫製作で、衣装の図案から型紙を製作し染め上げるまでを一つの紺屋ですべて行うのに対し、本土の型紙は、各模様によって専門の型彫り職人が存在し、商品として特化した型紙製作が行われている。この型紙を使った型染めシステムには、実際に染め上げる場所（各地方）や、材料・時期（流行）等の様々な状況が大きく反映している。なかでも型紙に最も如実に現れるのは、型紙の使用される場所による模様デザインの特徴や表現、型紙による布への模様転写の方法である。紅型

型紙と本土型の間には、このような相違点が表れてくる。したがって、一概に紅型型紙整理の内容のすべての項目が、本土の型紙の整理・分類方法に移行できるものではないが、ここでは、型紙分類の進め方やその後の反省点をふまえ、分類方法の一部を「紅型型紙データベースについて」としてまとめた。

《紅型型紙整理》

【6】「紅型」が独特な華やかさを持つ染織品として注目されるのに対し、「型紙」は表に出る機会にはなかった。道具である型紙には、先行する型紙研究や分類方法は確立されていなかった。このような状況の中、本研究では手始めに同じ鎌倉氏が蒐集した型紙コレクションを所有する沖縄県立博物館の調査カードを参考に、型紙全体を把握するための調査作業を行った。その後、更に詳細な調査とパソコンを導入したデータ整理に進んだ。作業手順は以下の順である。

「型紙実物資料からの調査とカードへの記録」→「型紙撮影」→「型紙写真データの貼り付け」→「PC へのデータ入力作業」

【7】作業は大きく二つに分けられる。まず型紙実物資料での作業である。調査カードにある項目に沿って調査・記録を取る。ここでの注意点は、現物での調査は頻繁に行えないことを念頭に速やかに確実な調査を進めることである。また項目にない情報も気が付いたことはできるかぎり「備考欄」へ書き込んだ。「型紙撮影」では、影を作らないよう専用のガラスケースに挟み立てて固定することで、専用の機材のない中で長期間に渡った撮影を安定した状況を整えて行った。次にパソコンでの作業に移る。調査カードからのデータ入力、撮影した型紙の画像データの貼り付け等の「データベースの製作」を行った。データ入力の作業方法を次に示す。型紙一枚分のデータ入力を完成させるのではなく、一つの項目に絞りまとめて入力した。このような作業の進め方には、際立った特徴に気が付く利点がある。各項目の傾向から、データにいくつかのまとまりが表れてくる。そこに新たな分類名を与えることで、データベースの内容を充実させるができた。

《データベースの活用法の例》

【8】一枚の型紙から得られる情報には文字の記録だけではなく、視覚による情報も確認できるように画像データも貼り付け一画面に情報をまとめた。

データベースの活用成果の一つとして、模様構成の特徴別に「分類コード」を付け整理することができた。データベースでは、きちんと項目をたて細分化しキーワードを決定することで、共通する条件を持つ型紙の選択が可能となった。

画像データとは、調査対象の「型紙」、その型紙に含まれる「文様」や、調査対象の型紙に対し型製作や模様構成等が近似するなどの「その他の型紙」、型紙に含まれる文字や型紙製作に関係する「情報」などである。

様々な形で型紙から得られる情報に項目を立て、文字・画像データを合わせ見比べられる

ようになったことで、型紙を検索しまとめて検証ができるようになり、紅型型紙の特徴が明確となった例や型紙製作に関する新たな方法への解明にも繋がった。次にその一例を示す。

【9】 ○同じ模様・同じ模様構成を持つ型紙数種の検索

型紙一枚のデータの記録の中には、その型紙に使用されている一つ一つの模様を抜き出し記録している「文様一覧」の項目がある。このデータを使用することで、同じモチーフを使用した型紙の発見が容易となる。

【10】 ○複数枚を一組とする大柄の型紙

「文様一覧」の文様に、さらに模様表現による特徴別に番号を加えた文様データベースを作った。このような文様データベースを作ったことで、同じ表現での文様を使用した型紙の検索が容易となった。

紅型には、二枚以上の型紙を一組として型置きし、大柄を布に付ける方法がある。例えばそのうちの一枚の型紙からどのような大柄へ展開するのか、次に続く型紙を判断することは困難である。この場合には、型紙の中から主となる文様（枝垂れ桜文）の番号をもとに検索し、連続する型紙の絞り込みが可能となる。

【11】 ○主となる模様とバリエーション豊かな地模様を組み合わせた型紙

型紙研究の中で紅型特有の模様構成が存在することがわかった。その特徴別に「分類コード」を決定した。このコードを使用し、類似する型紙の絞り込みができる。具体的に同じ番号を持つ文様を使用していなくても「分類コード」でまず大まかに検索し、更に型紙内で使用している模様の組み合わせをもとに検索を行い、類似する型紙を絞り込むことができる。

《紅型型紙データベースの現状》

【12】これまで行ってきた調査研究から、紅型型紙に関するデータベースの基盤はほぼ完成している段階であり、現在も引き続き型紙データの構築は続けられている。

これまでの調査研究を終えて得られた成果と反省点から、本土の型紙整理での参考になるのではないかと考える項目を二点あげる。まず一つ目は「備考欄」への記録である。「備考欄」には、重要な意味を持つ情報が多くあった。調査当初、有効な情報となるか判断できないと思われた。その後、備考欄内の記録を改めてクローズアップし、新たな研究成果が得られた。細かな特徴も数多くデータが集まることで型紙研究の重要な糸口となると考える。また、伝承的に受け継がれる型紙の製作方法は文献の形では残されないが、型紙には何らかの理由で書かれた文字や彫りや印などの情報が残されていることが調査でわかった。目的の分からない特徴や痕跡も可能な限り備考欄内に記録した結果、新たな成果を導き出す手掛かりとなった。

備考欄の記録方法での反省点としては、記録途中で段階的に振り返りをし、常に見直しを

行うことが必要である。調査項目として確立していない情報は、なるべく早い段階で項目名を付けることで検索による確認ができ、その後の作業時間が短縮された。

【13】もう一つは情報の収集に掛ける時間の短縮である。実物資料からのみ得られる情報と、画像データ化したもので出来る調査に分割することで時間の短縮が見込める。

「実物資料から知り得る情報」の選択は、行うべき調査を見極める必要があり、例えば、目視調査（型地紙の質、色や厚みなどを含む）・型紙に関する記録や関係者への聞き取り調査などがそれにあたる。次に、調査項目の内容を意識した撮影方法を取り入れることである。そこでは撮影方法の工夫で、更に時間短縮も可能となる。型紙調査で欠かせない寸法記録では、定規を置き撮影する方法で測り忘れにも対応でき、また型紙の色や状態はカラーチャートと一緒に撮影することで、調査する人物が代わることで起こる印象のズレを軽減できる。調査に項目を意識した撮影方法を取り入れることで、調査項目の約半分は画像データでの確認が可能であり、再調査の回避にもつながる。

《調査を終えて》

【14】これまでの経験と知識から、ある程度の調査結果を予測し進めることも多々ある中、思いもよらない結果も得られることがあった。データベースに現れる確かな情報に向き合うためのクリアな姿勢について改めて考えさせられた。

今回発表した沖縄県立芸術大学に収蔵された 1414 枚の紅型型紙を元としたデータベースは、これまで行われることのなかった紅型型紙の分類方法の基盤を確立した。紅型型紙を分類しまとめ、調査・研究から得られたことは、これまで気づかれていなかった型紙製作方法を解明するきっかけとなるなど、型紙製作の実践的な継承に繋がる成果も得られた。

紅型の製作は歴史的に一度途絶えている。型紙ともなると、道具としての立場からも特に残っておらず、この型紙資料も奇跡的に本土に渡っていたことで現存する貴重なものとなっている。これからも現存する僅かな紅型型紙資料について、紅型型紙データベースの構築が継続されることで、まだまだ研究者の考えられる範囲を超える結果や予想のつかない新たな結論が導き出される可能性がある、と、データベース製作で得られた成果から実感している。

ボストン美術館とニューイングランド地方における 型紙の受容と活用

堀田結子〈ボストン美術館 日本美術課 リサーチアソシエイト〉

19世紀末のニューイングランドでは、J. ラファージ(1835-1910)やW. S. ビゲロー(1850-1926)、A. W. ダウ(1857-1922)らが型紙を蒐集し、それらはデザインや美術教育の分野で活用された。1880年代にビゲローによってボストン美術館へ寄付された約4,600点の型紙は、当初作品に関する「道具」として正式なコレクションとは別に登録されたが、1910年にL. ウォーナー(1881-1955)によってその価値を見直す展示が行われた後、1915年には「研究資料」として改めて番号が付けられた。近年においては、国際的な型紙研究が活発となるに従い、ボストン美術館でも型紙の保存やデータ管理の方法が見直され、現在は生田ゆき氏の調査資料を元にデータベースの修正と再構築を行っている。

本発表では、ボストン美術館とその周辺のコミュニティで様々な評価、活用されてきた型紙の歴史を踏まえた上で、2000年以降美術館で運用されている情報管理システム(TMS)とコレクション検索サイトにおける型紙データの作成について、改善点と今後の展望を含めて報告する。



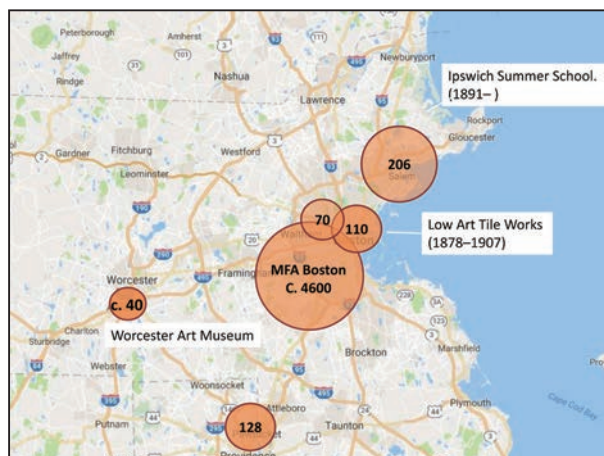
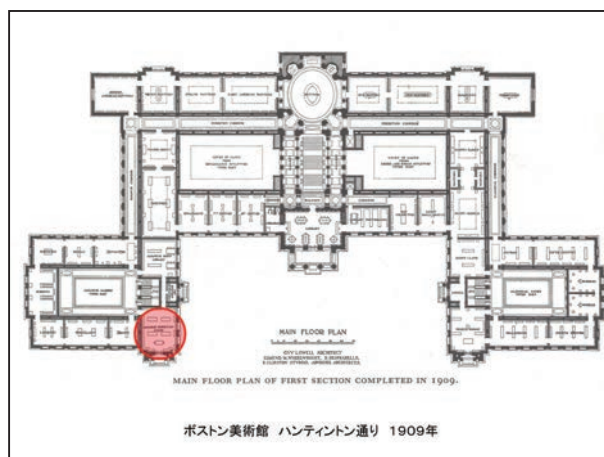
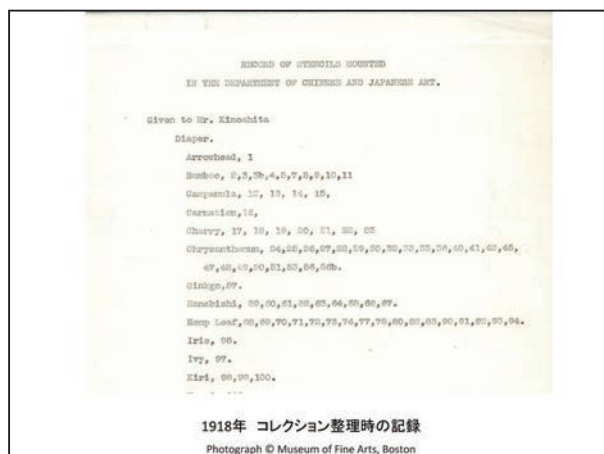
ボストン美術館において、作品の制作過程については、作品自体に比べて殆ど注目されてきませんでした。
(中略)
しかし、当館の型紙コレクションは、これまでわたしたちが「道具」と呼んできたものについての展覧会を開くことを正当化し、また型紙自体のもつ美術的価値が理解されるべきであることを示しています。

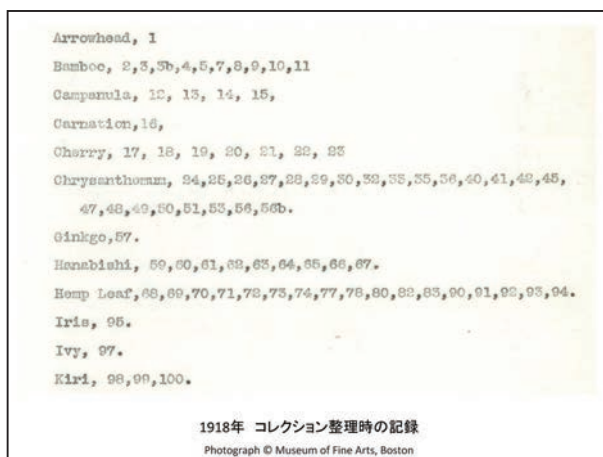
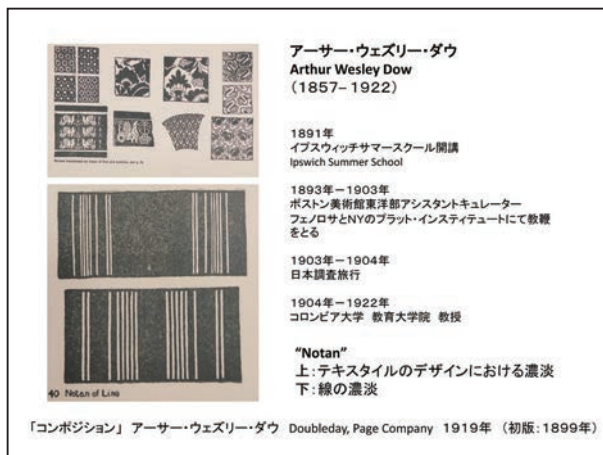
ラングドン・ウォーナー
「日本の型紙」『ボストン美術館紀要』
1910年10月

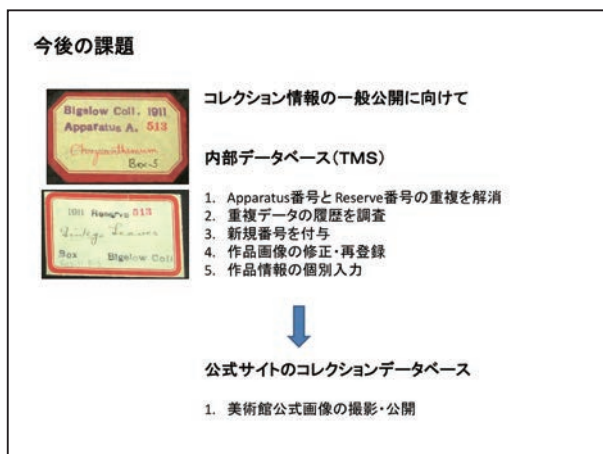
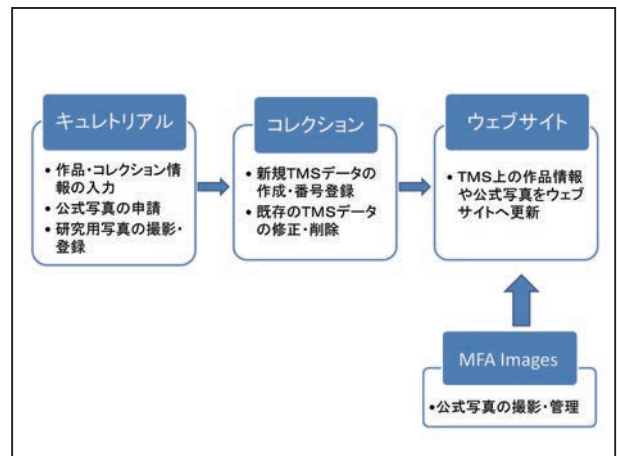
Process have interested this Museum much less than results (...) but in the case of textiles our collection of stencils justifies us in making an exhibition of what we called "tools," provided that it is clearly understood that they are worthy to rank as works of art themselves.

Langdon Warner
Museum of Fine Arts, Boston Bulletin
October, 1910

Photograph © Museum of Fine Arts, Boston







主要参考文献

Dow, Arthur W. *Composition*. Doubleday, Page Company. 1919.

Bowie, Theodore. *Langdon Warner through His Letters*. Indiana University Press. 1966.

Gilman, Benjamin Ives. "The Use of the Museum." *Museum of Fine Arts Bulletin*. The Museum of Fine Arts, Boston. 1915 June; 13(77).

Green, Nancy E. "Arthur Wesley Dow: His Art and His Influence." *Arthur Wesley Dow: His Art and His Influence*. Spanierman Gallery, LLC, New York. 1999.

Low, John Gardner. *Illustrated Catalogue of Art Tiles Made by J. G. & J. F. Low*. Chelsea, Mass. 1884

Michie, Thomas S. "Western Collecting of Japanese Stencils and Their Impact in America." *Curved Paper: The Art of the Japanese Stencil*. Santa Barbara Museum of Art and Weatherhill, Inc. 1998

Pennington, Richard. *Low Art Tiles*. CreateSpace. 2010 .

Warner, Langdon. "Japanese Stencils." *Museum of Fine Arts Bulletin*. The Museum of Fine Arts, Boston. 1910 October; 8(47).

Whitehill, Walter M. *Museum of Fine Arts Boston: A Centennial History, Volume One*. The Belknap Press of Harvard University Press. 1970.

型紙サミット発表

甲賀市水口歴史民俗資料館の型紙調査について

永井晃子〈甲賀市水口歴史民俗資料館 主査〉

水口（みなくち）宿は東海道 50 番目の宿場町である。東海道に面した甲賀市水口町宇田（うった）の紺屋利兵衛と植の紺屋忠平の両家には合わせて 2,113 枚の染用の型紙が残されていた。創業時期は明らかではないが、江戸時代後半には型染を始めていたと考えられる。また大正 10 年（1921）頃に考案された紗張りが含まれない点や聞き取り調査などから総合的に判断すると、下限は明治時代から大正初年におさまる。

両家の型紙に残された商印のうち形屋六治郎（形六）が全体の約 2 割に押されていた。江州行きの型紙販売商人のうち該当するのは日野を行商圈としていた笠木六治（次）郎であると考えられる。六治郎と日野の商印を共に押す型紙が残ること、京・大坂の商印が含まれることから、近江日野商人による行商の介在が指摘できる。墨書は地元の地名が散見でき、小紋をはじめとする着物、蒲団、油単などの文様は多種多様であり、両紺屋は地域の衣生活を支える役割を果たしたことがわかる。

国際ワークショップ
「学術資料としての『型紙』―資料の共有化と活用に向けて」
於 立命館大学アート・リサーチセンター 2016年10月29日（土）

《型紙サミット発表》 甲賀市水口歴史民俗資料館 の型紙調査について

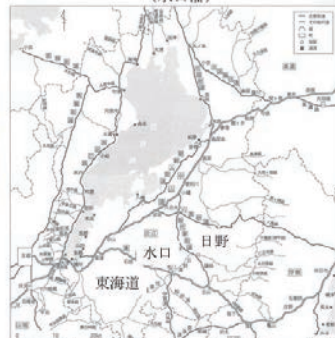
甲賀市水口歴史民俗資料館 永井晃子

〔 1 〕

水口

- ・ 甲賀市は滋賀県の南端に位置。
- ・ 東海道50番目の宿場町 水口宿
- ・ 徳川三代将軍家光の宿館 水口城（水口藩）

→水口は旧甲賀郡の中心

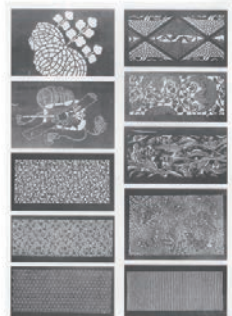


『甲賀市史』第3巻
「道・町・村の江戸時代」
2014年より

〔 2 〕

型紙寄贈の経緯

- ・ 水口町立歴史民俗資料館の創立
→1984年（昭和59年）
- ・ 開館の前年に宇田の紺屋利兵衛家より約400枚寄贈
- ・ 開館後、展示された型紙を見学された植の紺屋忠平家より約1700枚寄贈
- ・ 1989年（平成元年）発行『収藏品目録』第1集に掲載



天保八酉年
八月吉日受贈

〔 3 〕

「KATAGAMI Style」展 →「紺屋さんの型紙」展

- ・ 「KATAGAMI Style」展開催の前年度に収蔵庫整理をした際、型紙を確認。
- ・ 2012年（平成24年）開催の「KATAGAMI Style」展
- ・ 『収藏品目録』掲載を認識。
- ・ 「紺屋さんの型紙」展開催
- ・ 伊勢型紙技術保存会来館
- ・ 生田ゆき氏・鈴木亜季氏来館
→調査へ



〔 4 〕

全点撮影・計測（2,113枚）

- ・ 2012年12月18日～2015年9月15日（29回）＋撮り直し
- ・ 調査参加者：三重県立美術館、桑名市博物館、水口歴史民俗資料館
- ・ 表裏・ライトボックス点灯して表裏・計測・状態確認
- ・ 赤外線カメラで商印・墨書解説
- ・ 調査後、型紙を薄葉紙で包み、封筒に入れ、中性紙箱に保管



※発見資料掲載の型紙画像及び赤外線画像については明示したものは生田ゆき氏の撮影によるものです。記して謝意を表します。また、写真画像及びデザインを無断で転用、転載することを禁止します。

〔 5 〕

赤外線調査

撮影：宮川純雄



裏面



形勢
白子 勢州
六治郎



下山
源右衛門

〔 6 〕

計測項目

- ・通番
- ・寸法
 - 全体 天地・幅
 - 彫り 天地・幅
 - 送り星 天地・幅
 - 合わせ星 幅
- ・複数型の有無
- ・黒印の有無・内容
- ・朱印の有無・内容
- ・墨書の有無・内容
- ・彫外の目印
- ・(技法)
- ・糸入れの有無 入れ方
- ・紗張りの有無
- ・破損状況
- ・反故紙

通番	寸法	複数型	黒印	朱印	墨書	彫外目印	技法	糸入れ	紗張り	破損	反故紙
1	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
2	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
3	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
4	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
5	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
6	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
7	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
8	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
9	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
10	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
11	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
12	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
13	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
14	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
15	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
16	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
17	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
18	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
19	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
20	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
21	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
22	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
23	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
24	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
25	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
26	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
27	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
28	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
29	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
30	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
31	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
32	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
33	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
34	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
35	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
36	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
37	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
38	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
39	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
40	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
41	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
42	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
43	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
44	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
45	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
46	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
47	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
48	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
49	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
50	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
51	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
52	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
53	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
54	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
55	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
56	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
57	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
58	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
59	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
60	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
61	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
62	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
63	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
64	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
65	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
66	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
67	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
68	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
69	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
70	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
71	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
72	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
73	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
74	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
75	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
76	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
77	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
78	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
79	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
80	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
81	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
82	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
83	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
84	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
85	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
86	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
87	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
88	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
89	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
90	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
91	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
92	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
93	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
94	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
95	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
96	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
97	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
98	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
99	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
100	15.0x10.0	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有

[7]

平成27年度展覧会・講演会



土山歴史民俗資料館
夏季企画展
「村の紺屋さんの型紙」
2015年7月18日～9月27日

2015年9月12日講演会
「伊勢から甲賀へ、そして世界へ
～甲賀に伝えられた型紙から～」
講師：生田ゆき氏



[8]

水口の型紙について

- ・コレクターの関与がないため、紺屋に残された状態で保持されている。

【概要】

- ①大半が小紋型（一部大小の家紋型を含む）
- ②紗張りを施した型紙は1枚もない。
※糸かけで補修されている型紙が多い。
- ③彫り幅の広い（40cm近い）細やかな錐や道具彫りの型紙が散見される。
※儀式や祭のための袴に用いられたか。
- ④反故紙を用いた型紙が多い。

[9]

①大半が小紋型 （一部大小の家紋型を含む）

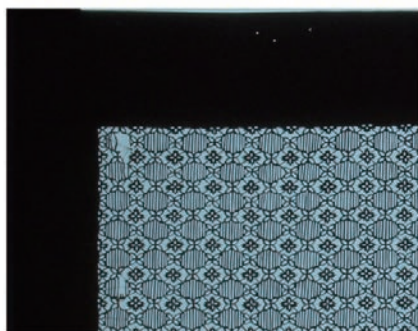


撮影：宮川茂雄



[10]

- ②紗張りを施した型紙は1枚もない。
※糸かけで補修されている型紙が多い。



[11]

- ③彫り幅の広い（40cm近い）細やかな錐や道具彫りの型紙が散見される。



撮影：宮川茂雄

[12]

※儀式や祭のための袴に用いられたか。



〔13〕

④反故紙を用いた型紙が多い。



〔14〕

紺屋を営んでいた時期

- ・文政二年（1819年）の墨書をもつ「形箱」。
 - ・天保八年（1837年）の墨書をもつ型紙。
 - ・大正十年（1921年）頃に考案された紗張りを含まない。
- 江戸時代後半から明治時代、大正初年におさまる。



〔15〕

紺屋を営んでいた時期

→河内長野市立ふるさと歴史学習館（くろまる館）所蔵の型紙と同時期か。

→ザンクト・ガレン・テキスタイル博物館やトレチャコフ美術館が所蔵する型紙の裏張りに用いられた新聞紙の発行年は明治36年（1903年）～40年（1907年）であり、同時期である可能性。

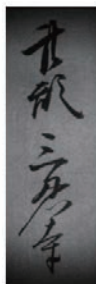
〔16〕

墨書

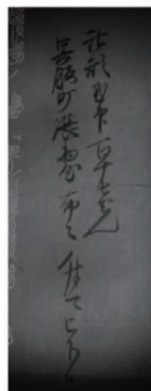
- ・近隣の地名が書かれた墨書が多い。



酒人 清左衛門



此形 三忍寺



此形玉印百十七ばん
呉服町張物屋布二付可被下候

〔17〕

此形玉印百十七ばん
呉服町張物屋布二付可被下候



撮影：宮川尾藤

〔18〕

商印



- ・「勢州／白子／形屋六治郎」256点「形六」148点
→形屋六治郎は403枚／全2,113枚
- ※内1枚の型紙は「勢州／白子／形屋六治郎」「形六」両方の商印を捺す

型紙の流通の行商形表 中田四郎『伊勢型紙の歴史』1970年より改定

型紙流通	文政 6.12	文政 7.9	文政 9.2/5	天保 5.7/8	年代不明
紙谷屋八兵衛	江州行	江州行	勢・江	勢・江	〔和歌山長門等〕
笠木屋六次郎	〃	〃	江州日野一越前・若	江・越前・若	紙谷八兵衛
笠木屋久右衛門	〃	〃	江州日野一越前・若	江・越前・若	笠木六治郎
小林屋政右衛門	〃	〃	江州日野一越前・若	江・越前・若	〔和歌山長門等〕
長谷川屋七郎	〃	〃	江州日野一越前・若	江・越前・若	〔和歌山長門等〕
松井屋三郎	〃	〃	江州日野一越前・若	江・越前・若	〔和歌山長門等〕

〔19〕

近江日野商人による行商を介した可能性

- ・伊勢と日野の商印が同じ型紙に捺されている




安川江 江州日野 村司野
勢州 形屋六治郎 白子

撮影：宮川邦雄

〔20〕

近江日野商人による行商を介した可能性

- ・京都の商印を含む。
→伊勢の型売り商人以外から型紙を購入した可能性




京都 上御召
二条 大坂
下町 四丁目
玉屋 京忠
清兵衛

撮影：宮川邦雄

〔21〕

近江日野商人による行商を介した可能性

- ・大坂の商印も含まれる。
→同じ商印が河内長野市所蔵の型紙にも捺される




上御召 大坂 四丁目 京忠

撮影：宮川邦雄

〔22〕

これまで 現状

【これまで】
調査 ⇒ 展示・講演会 ⇒ 発表

【現状】
・「型紙サミット」で情報交換
→商印と文様の関係性
商印「大坂安堂寺町四丁目／京忠」の型紙は当館では幾何学文が多いが、河内長野市所蔵型紙には比較的大きな文様が多い等、地域の違いにより違う文様の型紙を取り扱っている可能性。
・今年度報告書刊行予定→画像・論考
・計測データはネット公開視野に検討中

〔23〕

今後の課題

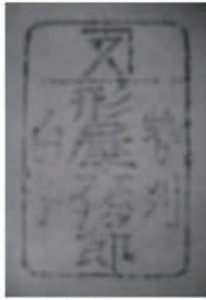
- ・修復は手つかず
- ・複製型の「外れ」の照合
- ・墨書分析
→コレクターの手を介していないため、地域史情報が得られる可能性
→文様名の把握
- ・商印分析
→商印の模写
→商印データベースを作成し、情報共有
→商印分布を把握することにより流通実態の把握
→海外へ輸出された型紙の日本における供給源の解明へ
- ・文様・技法の検討

〔参考文献〕
中田四郎編『伊勢型紙の歴史』1970年 伊勢型紙の歴史刊行会
『KATAGAMI Style』展図録2012年 日本経済新聞社
『極小の宇宙 手わざの粋』伊勢型紙の歴史と展開 2014年 三重県立美術館
『甲賀市史』第3巻「道・町・村の江戸時代」2014年
生田ゆき「伊勢から甲賀へ、そして世界へ―甲賀に伝えられた型紙から―」2015年
（あいこうが歴史塾2015年9月12日レジュメ）

〔24〕

伊勢

形屋六治郎 403 枚



「又 / 勢州 / 白子 / 形屋六治郎」
Mm0435



「形六」
Mm0308

■■■ 14 枚

内 8 枚は「形屋六治郎」と共に捺される



「■■■」
Mm0628

紺■ 1 枚

「形屋六治郎」と共に捺される



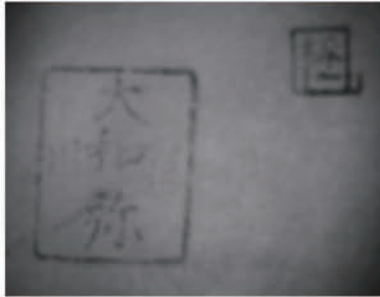
「紺■」
Mm0756

中甚 6 枚



「中甚」
Mm0229

大和弥 3 枚



「勢 / 州 / 大和弥」 「極」
Mm0805

寺尾才兵衛 3 枚



「寺 / 改」
Mm1574

寺尾才兵衛 1 枚



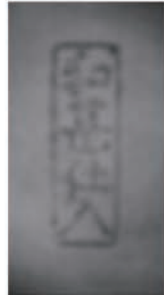
「勢州 / 白子 / 寺 / 寺尾」
Mm1280

和田甚兵衛 1 枚



「勢州 / 白子 / 和田」
Mm0067

和田甚兵衛 1 枚



「和甚仕入」
Mm0292

寺尾屋源三郎カ 3 枚



「寺 / 勢州 / 白子 / 寺源」
Mm1383

寺尾屋源三郎カ 2 枚
内 1 枚は「形屋六治郎」
内 1 枚は「寺源」
と共に捺される



「寺 / 仕入」
Mm301

細合太郎衛門 1 枚



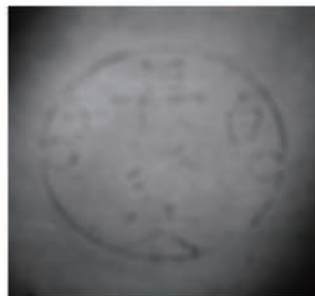
「えのく / 小道具 / 細合太郎衛門」
Mm0280

尾崎利兵衛 1 枚



「勢州 / 白子 / 尾利」
Mm0313

長嶋孫四郎 1 枚



「白子 / 長孫仕入」
Mm1672

形忠 1 枚



「伊 / 勢 / 形忠」
Mm0782

伊勢

山中■■■■ 1枚



「伊勢 / 白子 / 山中■■■■」
Mm0564

「上」 1枚



「上」 / 勢州 / 白子 / ■■■」
Mm0011

形與 1枚



「勢州 / 形與」
Mm1851

松田 1枚



「合 / 松田
/ 仕入」
Mm0033

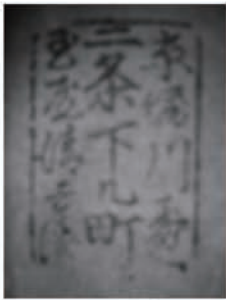
小林 1枚
伊勢力京都力
「玉屋清兵衛」
と共に捺される



「小林」
Mm0226

京都

玉屋清兵衛 14枚



「京堀川通 / 二条下ル町
/ 玉屋清兵衛」
Mm0765

合 7枚

内5枚は「玉屋清兵衛」
と共に捺される



「合」
Mm0785

■ 1枚

「玉屋清兵衛」と共に捺される



「■」
Mm2052

… 1枚

「玉屋清兵衛」と共に捺される



「…」
Mm0289

ひしや… 2枚



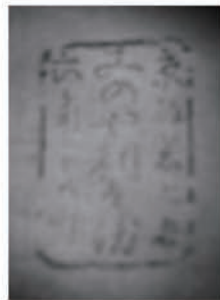
「…上ル町 / 京
/ ひしや…」
Mm0149

大坂屋半兵衛 2枚



「京都堀川通 / 御池上ル町
/ 大坂屋半兵衛」
Mm0592

みのや利兵衛 1枚



「京都■■■■ / 六角■■町
/ みのや利兵衛」
Mm0429

京仕入 1枚



「… / 京仕入 / …衛門」
Mm0434

大坂

堺力

京忠 23 枚



「大坂 / あんどうじ町
/ 四丁目 / 京忠」
Mm0569

京忠 (のれん) 16 枚
「京忠」と共に捺される



「安四 / ⊙ / 京忠」
(のれん)
Mm0569

堺庄 1 枚



「堺庄」
Mm0988

堺宗 1 枚



「堺宗」
Mm0100

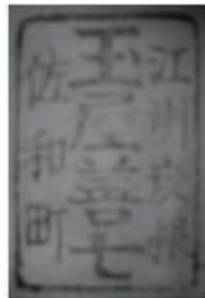
近江

紺屋利兵衛 1 枚
型紙寄贈者



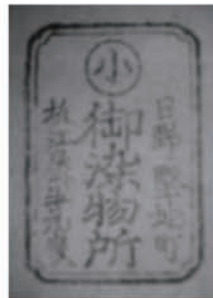
「尖 / 江州 / 宇田村
/ 紺や利兵衛」
Mm1709

玉屋善七 1 枚



「江州彦根 / 佐和町
/ 玉屋善七」
Mm0558

杉江屋半九良 1 枚



「日野堅地町 / 御染物所
/ 杉江屋半九良」
Mm0479

川原庄司 1 枚



「江州日野 / 安部居村
/ 川原庄司」
Mm0435

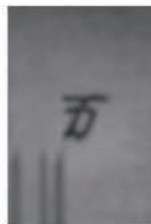
規格等級



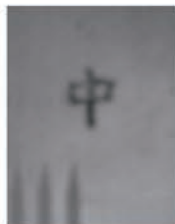
「極」



「上万」



「万」



「中」



「(大黒天)」



「小紋」



「上小紋」



「上小紋」



「小紋」



「小紋」



規格等級



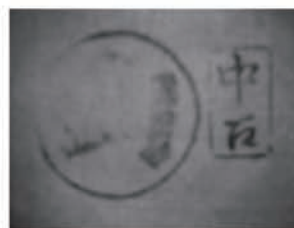
「上御召」



「上召」



「中御召」



「中召」



「極微細」

不明



「山」



「山」



「大半」



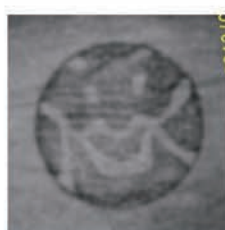
「定」



「三」



「改」



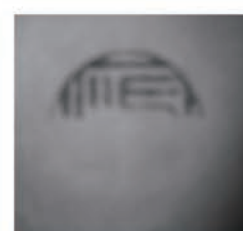
「忠」



「直賣」



「改■入」



「■■■」



「■■■」



「井...」



「...」
Mm1707
Mm1708

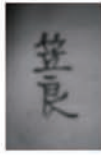


「賣」
Mm1708

不明



「〇嘉」



「笠良」



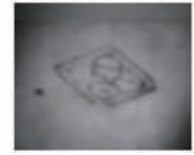
「介」



「北勘」



「改力」
異体字力



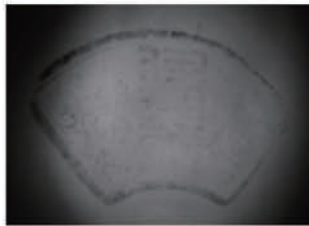
「(記号?)」

伊勢
山中権七カ 6枚



「山権」

伊勢
嶋村屋カ 3枚
内2枚は「嶋甚」と共に捺される



「嶋甚」

伊勢
嶋村屋カ 2枚
「嶋屋 / 甚兵衛」
と共に捺される



「嶋甚」

伊勢
嶋村屋カ 2枚



「嶋屋」

伊勢
嶋村屋カ 1枚



「嶋吉」

伊勢
嶋村屋カ 1枚



「嶋」



朱印



「庵販社」



「改仕入」



「山田」



2016 年 10 月 29 日 (土)

国際ワークショップ「学術資料としての『型紙』—資料の共有化と活用に向けて」

於 立命館大学アート・リサーチセンター

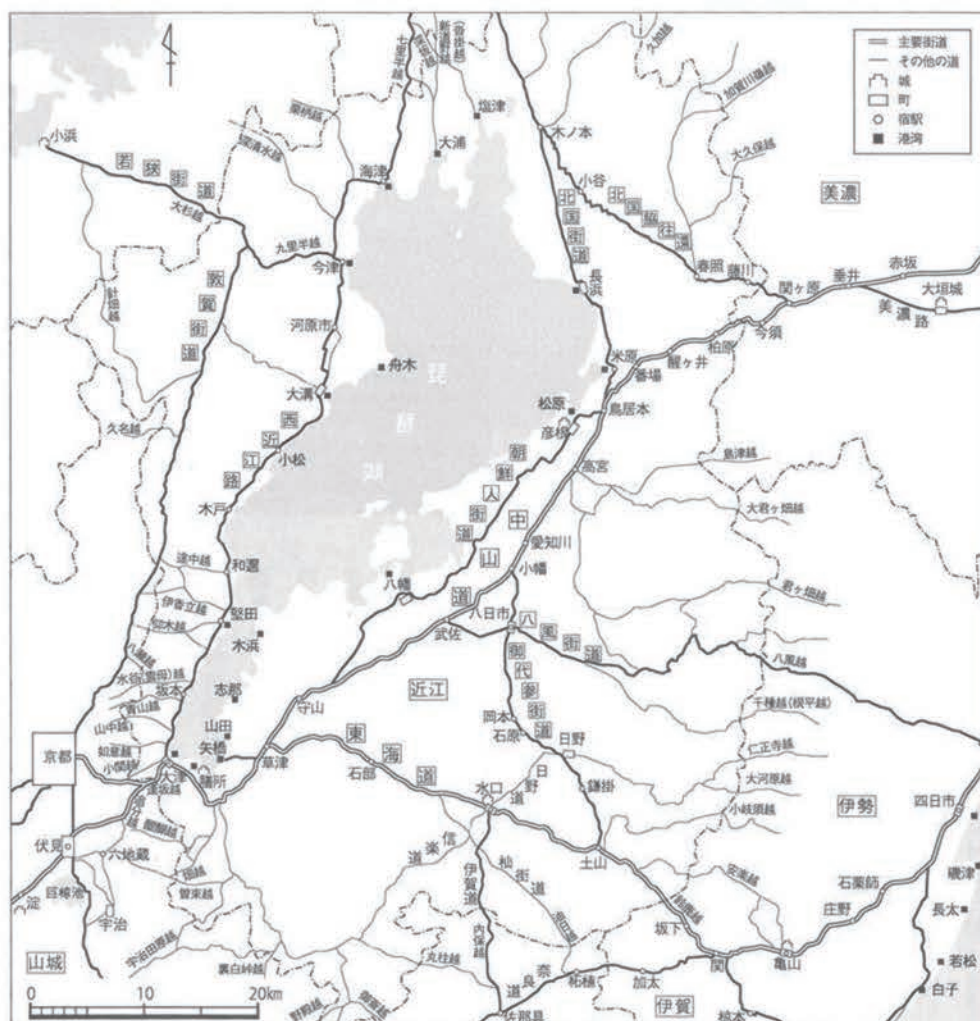
甲賀市水口歴史民俗資料館の型紙調査について

甲賀市水口歴史民俗資料館

永井晃子

◆滋賀県甲賀市水口（みなくち）の位置について

甲賀市は滋賀県の南端に位置する。水口宿は野洲川が水口平野へ流れ出る喉元に形成され、東海道の五十番目の宿場町として、また徳川三代将軍家光の宿館である水口城が築かれ、宿場町かつ城下町として栄えた旧甲賀郡の中心であった。



『甲賀市史』第3巻「道・町・村の江戸時代」2014年より

◆型紙寄贈の経緯

- ・水口町立歴史民俗資料館の創立は1984年（昭和59年）
- ・開館の前年に宇田の紺屋利兵衛家より約400枚寄贈
- ・開館後、展示された型紙を見学された植の紺屋忠平家より約1700枚寄贈
- ・1989年（平成元年）発行『収蔵品目録』第1集に掲載

◆調査

- ・2,113枚全点撮影・計測（2,113枚）
- ・2012年12月18日～2015年9月15日（29回）＋撮り直し
- ・調査参加者：三重県立美術館、桑名市博物館、水口歴史民俗資料館
- ・表裏・ライトボックス点灯して表裏・計測・状態確認
- ・赤外線カメラで商印・墨書解読
- ・調査後、型紙を薄葉紙で包み、封筒に入れ、中性紙箱に保管
- ・計測項目

通番

寸法

全体 天地・幅

彫り 天地・幅

送り星 天地・幅

合わせ星 幅

複数型の有無

黒印の有無・内容

朱印の有無・内容

墨書の有無・内容

彫外の目印

（技法）

糸入れの有無 入れ方

紗張りの有無

破損状況

反故紙

◆展覧会・講演会

- ・2015年（平成27年）7月18日～9月27日
土山歴史民俗資料館にて夏季企画展「村の紺屋さんの型紙」開催
- ・2015年（平成27年）9月12日
講演会「伊勢から甲賀へ、そして世界へ ―甲賀に伝えられた型紙から―」

◆甲賀市水口町の型紙について

コレクターの関与がないため、紺屋に残された状態で保持されている。

【概要】

①大半が小紋型（一部大小の家紋型を含む）

②紗張りを施した型紙は1枚もない。

※糸かけで補修されている型紙が多い。

③彫り幅の広い（40cm 近い）細やかな錐や道具彫りの型紙が散見される。

※儀式や祭のための裃に用いられたか。

④反故紙を用いた型紙が多い。

⑤紺屋を営んでいた時期

文政二年（1819年）の墨書をもつ「形箱」。

天保八年（1837年）の墨書をもつ型紙。

大正十年（1921年）頃に考案された紗張りを含まない。

→江戸時代後半から明治時代、大正初年におさまる。

→河内長野市立ふるさと歴史学習館（くろまる館）所蔵の型紙と同時期か。

→ザンクト・ガレン・テキスタイル博物館やトレチャコフ美術館が所蔵する型紙の裏張りに用いられた新聞紙の発行年は明治36年（1903年）～40年（1907年）であり、同時期である可能性。

◆赤外線調査による墨書・商印分析の成果

【墨書】

紺屋の近村地名が記されることが多い。

【商印】

「勢州／白子／形屋六治郎」256点「形六」148点

→形屋六治郎は403枚／全2,113枚

※内1枚の型紙は「勢州／白子／形屋六治郎」「形六」両方の商印を捺す

型 売 り 株 仲 間 の 行 商 形 態 表

型 売 株 仲 間	文政 6.12	文政 7. 9	文政 9. $\frac{2}{5}$	天保 5. $\frac{7}{8}$	年 代 不 明
紙 谷 屋 八 兵 衛	江州行き	江州行き	勢・江	勢・江	(和田甚兵衛持) 紙谷八兵衛
笠 木 屋 六 次 郎	〃	〃	江州日野一越前・若 狭・丹波	江・越前・若・ 丹波	笠木六治郎
笠 木 屋 久 治 郎	〃	〃	江州越川一越前・若 狭・摂州三田	江・越前・若・丹 波・丹後・播・摂	笠木六治郎持 久 治 郎
小 林 屋 政 右 衛 門	〃	〃	江州日野一越前一若 州小浜	昌右衛門 江・越前・若	休 (小林昌右衛門)
長 谷 川 屋 孫 七	〃	〃	平八 江州日野一丹 波・丹後	勢・江・越前・ 若・丹波・丹後	山中兵蔵持 升谷平八
松 井 屋 喜 三 郎	〃	〃	江州日野一越前・丹 波・亀山	江・越前・若・ 丹波	休 (松井喜三郎)

中田四朗『伊勢型紙の歴史』1970年より一部改変

◆近江日野商人による行商を介した可能性

- ・伊勢と日野の商印が同じ型紙に捺されている。
- ・京都の商印を含む。
→伊勢の型売り商人以外から型紙を購入した可能性。
- ・大坂の商印も含まれる。
→商印「大坂安堂寺町四丁目／京忠」は河内長野市所蔵の型紙にも捺される。

【これまで】

調査 ⇒ 展示・講演会 ⇒ 発表

【現状】

- ・「型紙サミット」で情報交換
→商印と文様の関係性
…商印「大坂安堂寺町四丁目／京忠」の型紙は当館では幾何学文が多いが、河内長野市所蔵型紙には比較的大きな文様が多い等、地域のニーズにより違う文様の型紙を取り扱っている可能性。
- ・今年度報告書刊行予定→画像＋論考
- ・計測データはネット公開視野に検討中

【今後の課題】

- ・修復は手つかず
- ・複数型の「外れ」の照合
- ・墨書分析
→コレクターの手を介していないため、地域史情報が得られる可能性
→文様名の把握
- ・商印分析
→商印の採寸
→商印データベースを作成し、情報共有
→商印分布を把握することにより流通実態の把握
→海外へ輸出された型紙の日本における供給源の解明へ
- ・文様・技法の検討

〈参考文献〉

中田四朗編『伊勢型紙の歴史』1970年 伊勢型紙の歴史刊行会

「KATAGAMI Style」展図録 2012年 日本経済新聞社

「極小の宇宙 手わざの粋 ―伊勢型紙の歴史と展開―」2014年 三重県立美術館

『甲賀市史』第3巻「道・町・村の江戸時代」2014年

生田ゆき「伊勢から甲賀へ、そして世界へ ―甲賀に伝えられた型紙から―」2015年

(あいこうか歴史塾 2015年9月12日レジュメ)

型紙サミット発表

河内長野市立ふるさと歴史学習館（くろまる館）の 型紙調査について

松野准子〈河内長野市ふるさと歴史学習館（くろまる館） 学芸員〉

本発表では、当館が所蔵する型紙の紹介と現状課題について報告する。

当館の位置する河内長野市は大阪府の南東部にあり、東は奈良県、南は和歌山県に接している。当館が所蔵する1,604点の型紙は、明治期を中心に河内長野市高向地区で営んでいた1軒の元紺屋にのこされていたものである。型紙の多くは伊勢（三重県鈴鹿市）で製作され、主に当地域の特産品であった「河内木綿」の文様染めに使われていた。文様には、河内木綿の特徴である菊花唐草や鶴亀・松竹梅など、吉祥柄で大胆な構図が多くみられる。

型紙の調査については、現在、写真撮影（高精細画像・赤外線画像）やサイズ計測、状態確認などを終え、高精細画像の一部はデジタルアーカイブ化している。また赤外線撮影で明らかになった商印や墨書などの情報を「型紙サミット」のメンバーと共有、研究しており、今後はより広いネットワークで情報を共有できればと思う。

立命館大学アート・リサーチセンター 国際ワークショップ
「学術資料としての『型紙』—資料の共有化と活用に向けて—」
2016.10.29 sat

河内長野市立 ふるさと歴史学習館（くろまる館） の型紙調査について



河内長野市立
ふるさと歴史学習館
(くろまる館)
学芸員 松野 准子

河内長野市立 ふるさと歴史学習館（くろまる館） 所蔵の紺屋型紙資料

- 使用場所
河内長野市高向(たこう)
水落にあった
1軒の元紺屋「栗岡店」
- 点数
1604点
- 来歴
昭和61(1986)年、元紺屋
の栗岡家から、万覚帳1冊
とともに一括寄贈
- 使用年代
明治時代中心



■紺屋を営んでいた時代 明治時代中心（江戸後期?～大正初期?）

＜聞き取り調査より＞
江戸末期～明治初期、
紺屋の初代が、播州（兵庫県）
から河内の高向へ移り、
紺屋を営んでいた。
二代目（江戸末期の生まれ）
までは紺屋を営んでいたと
思われる。



＜赤外線撮影調査より＞ 年紀のある型紙

・寛政4(1792)年の墨書:1枚 / 慶応元(1865)年の墨書:6枚



寛政四年子九月九日

拡大
(赤外線画像)



寛政4(1792)年の墨書がある型紙

＜糸入れ＞

糸入れのある型紙は多数あるが、紗張り(大正10(1921)年頃に
考案された技法)は一枚も見られない。



糸入れ

糸入れのある型紙（縞に文入り松皮菱文）

■文様の特徴

突彫り、大柄で大胆な構図、吉祥柄
→江戸時代からの河内地方の特産品「河内木綿」の特徴でもある。



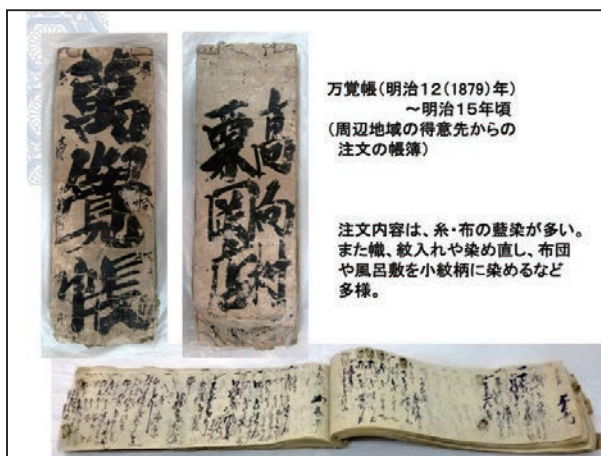
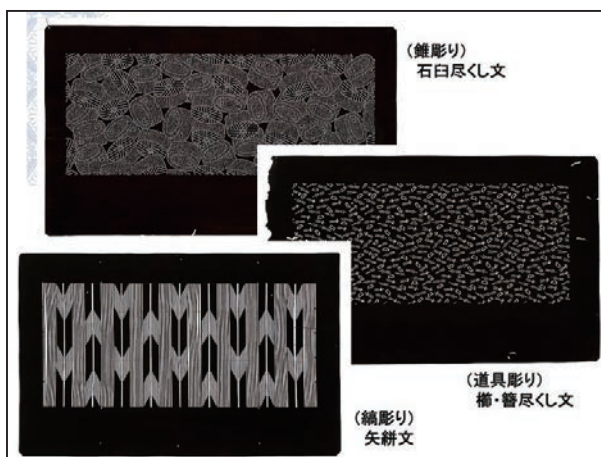
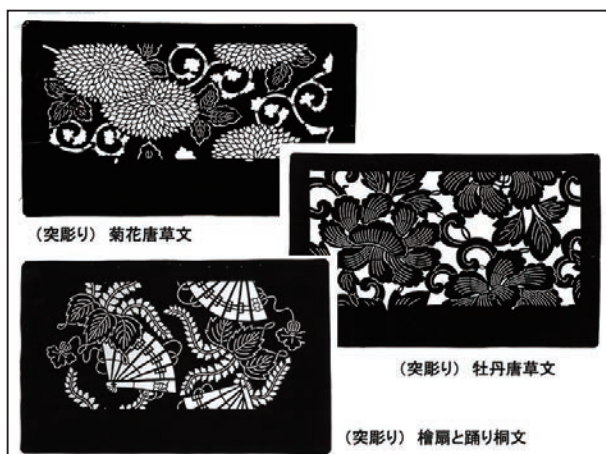
（突彫り）
鶴亀・松竹梅の丸に唐草文



（突彫り）鳳凰の丸に唐草文



（突彫り）熨斗鶴文



■型紙に押された商印（型紙販売商人のはんこ）
→型紙の流通がわかる

はんこのある型紙・・・842枚／1604枚

- ・伊勢の商印・・・356枚
（内、「宮基」292枚）
＝宮原屋基八
- ・大坂の商印・・・237枚
- ・播州の商印・・・40枚
- ・江戸の商印・・・1枚

（伊勢）宮原屋基八の商印：292枚

「勢州/宮基/白子」 「いせ/宮基」

<宮原屋基八の行商圏>
山城・河内・和泉・摂津・紀州

型売り株仲間間の行商形態表

型売り株仲間	文政 6.12	文政 7.9	文政 9.2/5	天保 5.7/8	年代不明
宮原屋基八	紀州行き	紀州行き	威・河・泉・摂・紀・城・紀	基八	

（中田四朗『伊勢型紙の歴史』1970年（加工）より）

■紺屋お手製の型紙
家紋・のれん・旗などのオーダーメイド

家紋の型紙

栗岡幸永治（紺屋初代）
「高水/紺幸」「高紺」「高紺幸」

■型紙の墨書
年紀・文様・染色の注文主や内容・メモなど

・型紙の文様
「菊柏」

・注文主
「日の西久保」
↑
万覚帳の注文主と一致

・年紀
（左）「寛政四年子九月九日」（1792年）
（右）「慶尾（応の誤り）元年丑閏五月廿一日」（1865年）

■反故紙（全体の1/4にあたる）

・戸籍

・反故紙の年紀

・落書き？
下書き？

■型紙調査の現状と課題

<現状>

- ・写真撮影（高精細画像・赤外線画像）
※高精細画像の一部（250枚）をデジタルアーカイブ化（商用）
- ・寸法計測
- ・状態確認
- ・調査内容のデータ化（進行中）
- ・「型紙サミット」で商印調査の情報共有 など

<今後の課題>

- ・複数型の突き合わせ
- ・調査内容のデータ化、成果品の作成
- ・デジタルアーカイブ化（学術用として）
- ・墨書内容の分析
- ・商印情報共有のネットワーク化
→商印の分布から型紙の流通を把握できる

一河内長野市立ふるさと歴史学習館(くろまる館)所蔵紺屋型紙の商印一覧一

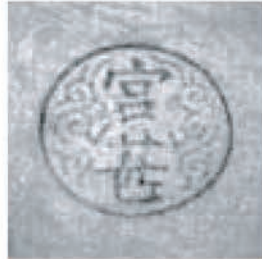
伊勢の商印

宮原屋甚八の商印：292枚

(宮原屋甚八の行商圈：山城・河内・和泉・摂津・紀州)



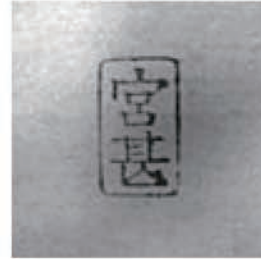
「勢州/宮甚/白子」



「宮甚」



「宮甚」



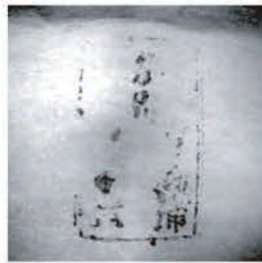
「宮甚」



「いせ/宮甚」

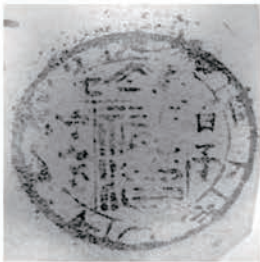


「勢州/白子鼓ヶ浦/
甚八仕入」



「勢州/白子鼓ヶ浦/
■■ (甚八?) 仕入」

不明の商印：49枚

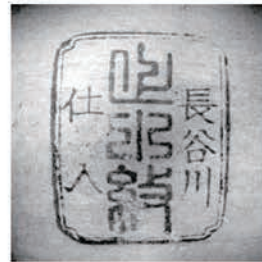


「イセ/〆/白子/■■/寺家/
■■■■トモシイセハ■?」

長谷川の商印：2枚

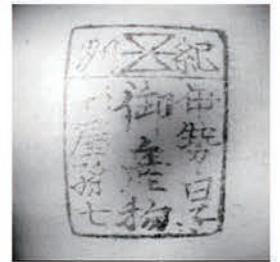


「勢州/〆/長谷川/白子」



「長谷川/上小紋/仕入」

形屋孫七の商印：2枚



「紀州/〆/伊勢白子/
御産物/形屋孫七」

松孫の商印：2枚

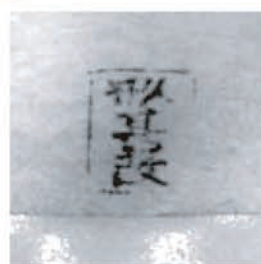


「勢州/〆/松孫/白子」

和田甚兵衛の商印：2枚



「勢州/〆/和甚/白子」



「形甚改」

山中権七の商印：1枚



「形権」

伊勢の商印

寺尾才兵衛の商印：1枚

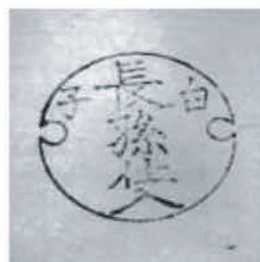


「サ」/勢州/寺尾/白子

長嶋孫四郎の商印：1枚

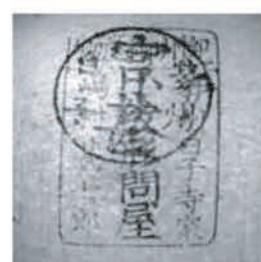


「紀州御免/勢州白子/御染形/長嶋孫四郎」



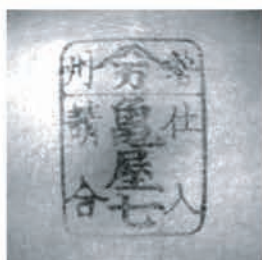
「白子/長孫仕入」

嶋村甚七郎の商印：1枚



「紀州御産物/勢州白子寺家/小紋形問屋/嶋村甚七郎」
「勢州/宮甚/白子」

亀屋七の商印：1枚



「勢州/万/仕入/亀屋七/請合」

尾崎利兵衛の商印：1枚



「仕入/里」/勢州白子/小紋/尾形屋
「里」/勢州/尾利/白子



形傳の商印：1枚



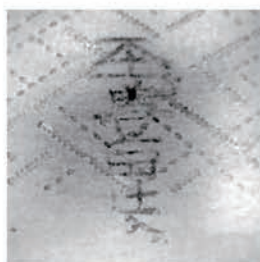
「仕入/川」/勢州/形傳/白子

小林の商印：1枚



「小」/勢州/小林/白子

豊田の商印：1枚



「土」/豊田仕入

形屋六治郎の商印：1枚

※甲賀市所蔵の型紙に多い商印



「形六」

細合太良工門の商印：1枚



「予紅/井」/糸のぐ/細合太良工門/小道具

大坂の商印

■字：157枚



「大阪/■字」

京忠：46枚



「大坂四丁目/
あんどじ町(安堂寺町)/
京忠」



「安四/⊙/京忠」
(のれん)



「安四/⊙/京忠」
(のれん)

鍵屋善兵衛：25枚



「大坂内本町筋/
善/かぎや/
太郎左衛門町」



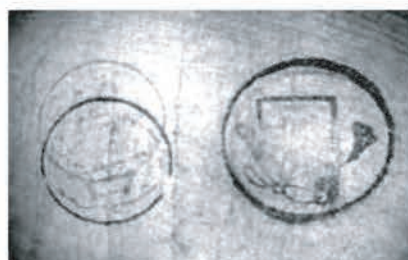
「大坂内本町筋/
善/鍵屋善兵衛/
太郎左衛門町」



「大坂/ときわ町式丁/
京形/かぎや善兵衛」
「善」



「善(鍵の絵に善)」



「善」「(鍵の絵)」



「理」「(鍵の絵)」

和泉屋喜右衛門：1枚



「大坂高麗橋筋/
和泉屋喜右衛門/
鳶町二丁目」
「京形」

和泉屋喜右衛門か？：7枚



「泉喜」



「二/泉屋仕入」

多金屋庄左衛門：1枚

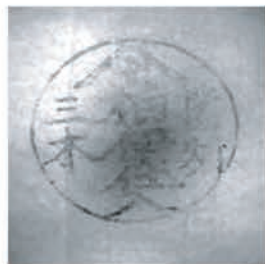


「田/伊勢/京都/
大坂大手筋■■■(折屋町?)/
小紋形類/
多金屋庄左衛門」

播州の商印

柏屋伊右衛門：30枚

※文政6(1823)年『型売名前帳並に職人名前』
(鈴鹿市史掲載)に迷惑者として名前がみえる



「十 / 播州 / 柏伊仕入 / 三木」



「柏伊」

丸山屋権右衛門：5枚



「三丸権」

井筒屋治兵衛：3枚



「三木 / 井筒治」

田中庄五良：2枚



「田庄」

油屋吉兵衛：1枚



「油吉改」

江戸の商印

嶋村：1枚



「江戸 / 大傳馬 / 嶋村 / 貳丁目」
「勢州 / 宮甚 / 白子」

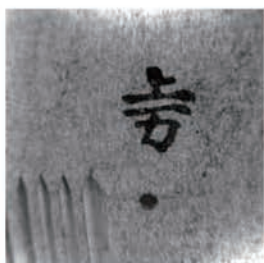
規格等級



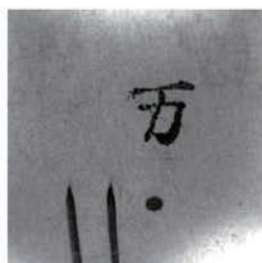
「極万」



「極」



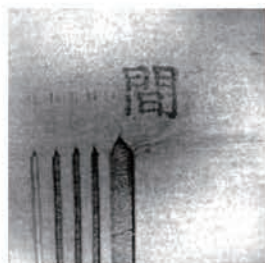
「上万」



「万」



「中」



「間」



「みちん」「中」



「小紋」



「小紋」



「上形」



「京形」



「上召」



「中召」



「御召」

不明



「山」



「山」



「播長」「上」



「大半」



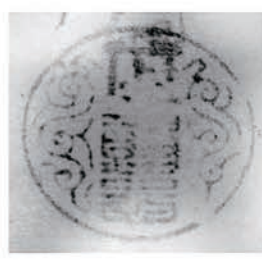
「大」



「定」



「定」



「■■■■」



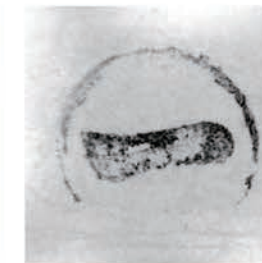
「さ/金」



「■由」



「理」



「一」



「京/小嶋屋/小紋形/
大次良」



「■■■/丸山屋?/
■■■太兵衛?」



「三郷?之内/久兵衛」
(反転)



「柳」



「(大黒天)」



「忠」



「■」



「(宝珠)」



「三/山兵」



「山権」



「倉平」



「長? ■」



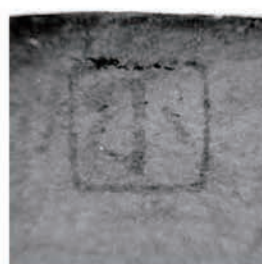
「万治」



「■」



「義」



「小」



「重」



「相改」

不明



「善」



「庄」



「合」



「十」



「十」



「玉」



「上」



「金」



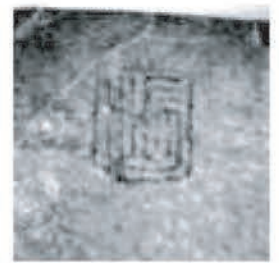
「(記号?)」



「(記号?)」



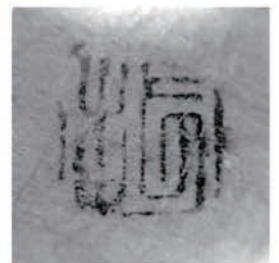
「(記号?)」



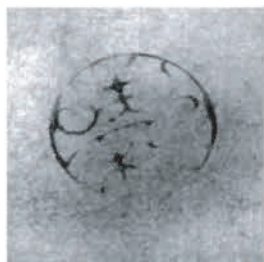
「嶋?」



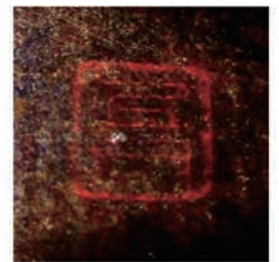
「俗武」



〈朱印〉



「■印」



型紙サミット発表

型紙調査における反故紙の扱いについて —文字情報からわかること—

鈴木亜季〈桑名市博物館 学芸員〉

江戸時代、伊勢国白子村・寺家村（現在の三重県鈴鹿市）において多くの型紙が生産され、その型紙は、型売商人によって広く全国各地へ流通していた。伊勢型紙の歴史資料としては型売商人の株仲間に関する文書類が残されているが、その生産や流通の実態は未だに明らかになっていないことが多い。文字として記されなかった部分については、各地に残された型紙の情報を集積することで、より深くその実態に迫ることができると考える。

今回、甲賀市水口歴史民俗資料館での型紙調査において、墨で文字が記された型紙や地紙に反故紙を用いている型紙をみることができた。反故紙には宗門改帳などが用いられており、中には「松阪」と地名を読むことができたものもある。これらは、地紙が作られた年代や生産地を知る手がかりとなる。型紙の持つ情報を読み取ることで、伊勢型紙の歴史研究を少しでも進めることができればと思う。

型紙調査における 反故紙の扱いについて

―文字情報からわかること―

平成28年10月29日(土)
立命館大学アート・リサーチセンター
国際ワークショップ「学術資料としての『型紙』」

桑名市博物館 鈴木亜季

伊勢型紙の歴史を探る①

- ・ 鈴鹿市所蔵
- ・ 寺尾家文書 伊勢型紙関係文書から
- ・ 江戸時代
- ・ 型売り商人の株仲間組織
- ・ 国行き仲間などの規則

型紙に携わる人々



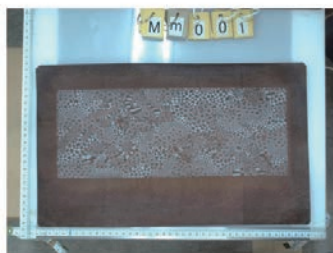
- ・ ①型屋・型彫り職人：地紙・型紙生産
- ・ ②型屋・型売り商人：行商（流通）
- ・ ③紺屋・型染め師：染色（消費）

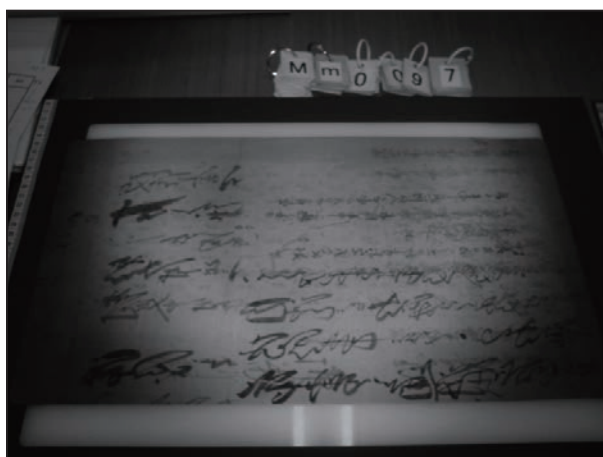
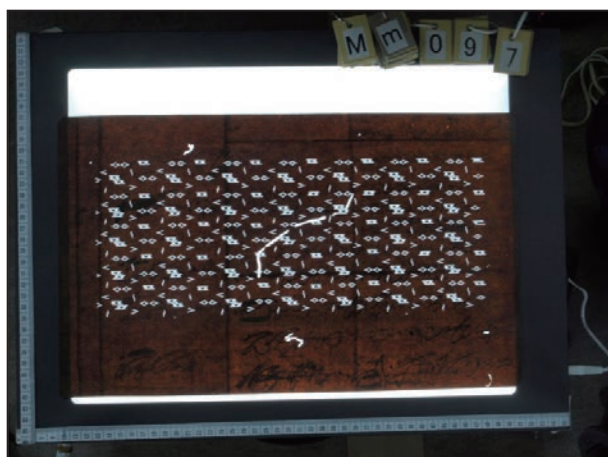
伊勢型紙の歴史を探る②

- ・ 産業博覧会出品
- ・ 出品物の製造工程記録
- ・ 国内外への型紙の広がり
- ・ 明治時代以降の他産業の機械化
- ・ 問題点：
 - ・ 白子・寺家内の資料を中心とした研究。
 - ・ 各地に残された型紙の情報を集積し、型紙の生産・流通の実態に迫りたい。

型紙調査

- ・ 水口歴史民俗資料館所蔵の型紙
- ・ 赤外線をあて、商印・墨書を確認。





地紙

- 和紙を柿渋で貼り合わせる。
- 白子・寺家内で地紙を製造。

表



裏

反故紙例

• Mm1118



一、善覚寺
旦那

• Mm1488



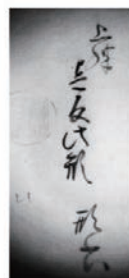
地券之證

反故紙から読み取れること

- 原紙に古紙を使用
- (寺社の過去帳・地券)
- 古紙から読み取れること
- 文書として使われていた時代・場所
- →「松坂」「岐阜」など
白子・寺家に近い地名
- 襖の裏張文書など、廃棄の文書再利用?

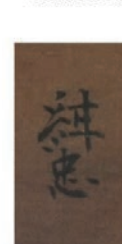
墨書例

• Mm0170

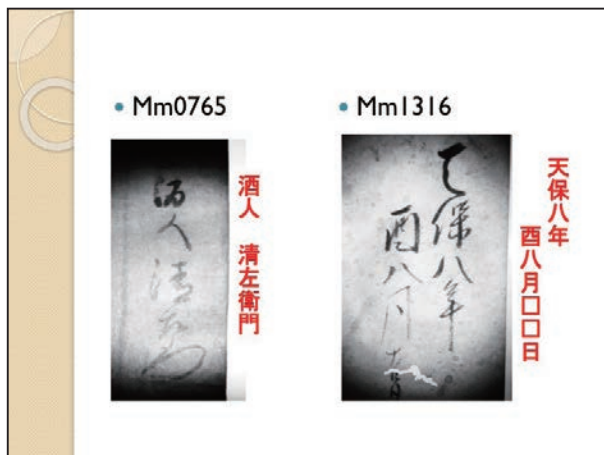


上紺
膏反此形
形六

• Mm0851



紺忠



墨書から読み取れること

- 時代
- 人名・地名
- 型の種類
- 注文内容
- 型屋名・紺屋名
- 染める生地の種類
- 型紙が売買・使用された状況

型紙資料からみる今後の課題

- 生産：生産工程の変化
- 地紙生産地（白子・寺家）と
- 原紙収集地（例：松坂・岐阜）との関係
- 流通：商人の販売方法
- 他の商人が介在する可能性
- 染色：紺屋における型紙の利用法
- 地域における染物の消費状況

型紙から読み取れること 型紙調査の有効性

生田ゆき〈三重県立美術館 学芸員〉

1枚の型紙から、いかに多くの情報を取得するか。型紙調査の成否はこれにかかっている。しかしながら、やみくもにデータを集積しても、結果として時間の浪費となる危険性もはらんでいる。そのため、それぞれの調査で得られた数値や所見が一体何を意味するのか、常に意識的であることが求められよう。

加えて、そこには調査環境の問題も関わってくる。機材や時間、人員など充分でない中で調査を行わねばならない状況に出くわすことも少なくない。その場合、何のデータを捨てて、何のデータを取るのか、すなわち、何を目的として調査を行うのかについて自覚的であらねばならない。

以上のことを踏まえて、本ワークショップでは、過去の型紙調査の事例を紹介しながら、より効果的な型紙調査について参加者とともに考える場としていきたい。

型紙から読み取れること

型紙調査の有効性

2016年10月30日（日）
場：立命館大学表参キャンパス アート・リサーチセンター
生田ゆき（三重県立美術館 学芸員）

型紙から読み取れること

型紙調査の有効性

- ・ 0. はじめに 型紙調査とは何か
- ・ 1. 型紙調査の目的
- ・ 2. 型紙調査の方法
- ・ 3. 型紙調査の装備
- ・ 4. おわりに 型紙調査の有効性

0. はじめに 型紙調査とは何か

- ・ 調査すべき対象としての型紙
- ・ 「調査」の先にあるもの

国内・海外の調査から

2007年～08年 鈴鹿市所蔵古代型紙（約1800枚）の調査

2010年～16年 海外所蔵の型紙の調査

（モスクワ、ベルン（左）、ウィーン（中）、ザクトガレン、シュトゥットガルト（右）、ロンドン、サンクト・ハーバラ、ニューヨーク、ドレスデン、バーゼル、チューリッヒ、ボストン 等）

2007年～16年 国内所蔵の型紙の調査

（江戸東京博物館、水口歴史民俗資料館、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館、沖縄県立博物館・美術館、日本民藝館、金沢美術工芸大学 等）

「調査」の先にあるもの

- ・ 型紙/型染：日本染色史、日本工芸史
- ・ 型紙/型売り商、紺屋：地方産業史、地域振興
- ・ 型紙/輸出：経済史、外交史、交流史
- ・ 型紙/輸出：美術史、デザイン史、ジャポニスム研究、

1. 型紙調査の目的

- ・ 型紙調査から分かること/分からないこと
- ・ 何を明らかにすべく型紙を調査するのか

水口歴史民俗資料館の型紙調査から

・商印について
一勢洲白子（三重県）、京都堀川、大坂安堂寺町、江州（滋賀県）の地名を持つ商印が確認できる。
※「形屋六治郎」＝笠木屋六治郎（次郎） 商標：江州日野・越前・若狭・丹波



・「反故紙」に書かれた文字⇒直接型紙に開帳する年代ではないが、少なくともその年よりも後に型紙が制作されたことを示す材料。

・墨書からわかること⇒注文先、色の指定



紅型型紙調査から 「改変」された紅型型紙

「改変」の諸相

①いつ改変したのか
型紙が完成する前
型紙が完成した後⇒染色前/染色後

②だれが改変したのか
同じ彫り手が改変
別の彫り手が改変

③どこで改変したのか
沖縄
その他の地域

④なぜ改変しなければいけなかったのか
生地幅の変化
染色用途の変更
型紙の注文の誤り⇒なぜ新たに作り直すに、既存のものに手を加える判断をしたのか

紅型型紙と商印

鎌倉芳太郎田蔵の紅型型紙における商印を持つ型紙の割合

・沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館 10点（そのうち白子と明記5点、不明5点）/全1414点
・沖縄県立博物館・美術館 4点 /全590点

何を明らかにすべく型紙を調査するのか

- ・型紙の製作年
- ・型紙製作や加工の発展史
- ・文様の伝播と展開
- ・紺屋の業務形態と販売内容
- ・型紙の流通形態＝型売り商の商圈、型売り商のネットワーク
⇒型紙コレクションの源流

2. 型紙調査の方法

- ・制約の中の型紙調査
時間、人員、設備、経験
- ・型紙コレクションの性格
当初のままの状態が保存されているのか
供給源が単体/複数なのか
コレクターによって、取捨選択がなされた後なのか



3. 型紙調査の装備

- ・時間、人員、経験に合わせて柔軟に対応
 - ←何のための型紙調査か
- ・調査先、調査対象、調査後のデータ整理等を考慮した装備
 - ←調査先の規定（調査時間、調査方法、使用機材、取り扱いガイドライン等）を順守することが必須

型紙調査装備一覧

【取り扱い】

白手袋（ニトリル（パウダー無し）手袋が理想的）、マスク、ウェットティッシュ

【撮影】

デジタルカメラ（一眼レフ、小型カメラ）※単焦点マクロレンズが理想的、ただし、手持ちの撮影の場合24ミリの広角が便利

赤外線カメラ（一眼レフ、赤外線ライト、赤外線フィルターで代用）

予備バッテリー、バッテリーチャージャー、リモコン、三脚、ライトボックス、カウンター、カラーチャート、コンパクトフラッシュ、SDカード

【計測等】

調査記録用紙、メモ帳、ハンディライト、ヘッドループ、ハンディループ、メジャー（布タイプ、映しこみ用に目盛り部のみのもの2本）

鉛筆、消しゴム、マジック（黒、赤）、ポストイット（大小）、輪ゴム、封筒、クリップ、マスキングテープ、養生テープ、糊、

延長コード、コンセント変換プラグ、変圧器、パソコン、USBメモリ、カードリーダー

赤外線写真の撮影方法

大下浩司・下山達「汎用デジタル一眼レフカメラを用いた赤外線写真撮影法」『文化財情報学研究』11号、吉備国際大学文化財総合研究センター、2014年3月7日、1-8頁

大下浩司・下山達「汎用デジタル一眼レフカメラを用いた赤外線写真撮影におけるシャープカットフィルターの影響」『文化財情報学研究』12号、吉備国際大学文化財総合研究センター、2015年3月10日、1-6頁

大下浩司・下山達「IR LEDライト搭載デジタルビデオカメラを用いた赤外線写真撮影」『文化財情報学研究』12号、吉備国際大学文化財総合研究センター、2015年3月10日、7-13頁

大下浩司・下山達「汎用デジタル一眼レフカメラによる赤外線写真撮影に適したハンディタイプ赤外線ライトの比較研究」『文化財情報学研究』13号、吉備国際大学文化財総合研究センター、2015年3月10日、1-9頁

大下浩司・下山達「ハンディタイプ赤外線ライトと汎用デジタル一眼レフカメラを用いた赤外線写真撮影における赤外線照射の角度およびレンズの絞り値の最適化」『文化財情報学研究』13号、吉備国際大学文化財総合研究センター、2015年3月10日、11-20頁

4. おわりに 型紙調査の有効性

- ・「資料」としての型紙
- ・「型紙」研究の充実、そして「型紙」研究からの発展
- ・新しい「型紙」研究への土台

2016年10月30日(日)

於: 立命館大学衣笠キャンパス アート・リサーチセンター

生田ゆき (三重県立美術館 学芸員)

0. はじめに 型紙調査とは何か

1. 型紙調査の目的

2. 型紙調査の方法

3. 型紙調査の装備

4. おわりに 型紙調査の有効性

0. はじめに 型紙調査とは何か

・調査すべき対象としての型紙

国内・海外の調査から

2007年～08年 鈴鹿市所蔵古代型紙(約1800枚)の調査

2010年～16年 海外所蔵の型紙の調査

(モスクワ、ベルン(左)、ウィーン(中)、ザンクトガレン、シュトゥットガルト(右)、ロンドン、サンタ・バーバラ、ニューヨーク、ドレスデン、バーゼル、チューリッヒ、ボストン 等)

2007年～16年 国内所蔵の型紙の調査

(江戸東京博物館、水口歴史民俗資料館、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館、沖縄県立博物館・美術館、日本民藝館、金沢美術工芸大学 等)

・「調査」の先にあるもの

型紙/型染: 日本染色史、日本工芸史

型紙/型売り商、紺屋: 地方産業史、地域振興

型紙/輸出: 経済史、外交史、交流史

型紙/輸出: 美術史、デザイン史、ジャポニスム研究、

1. 型紙調査の目的

・型紙調査から分かること/分からないこと

水口歴史民俗資料館の型紙調査から

商印について←勢洲白子(三重県)、京都堀川、大坂安堂寺町、江州(滋賀県)の地名を持つ商印が確認できる。

※「形屋六治郎」= 笠木屋六治郎(次郎) 商圏: 江州日野・越前・若狭・丹波

「反故紙」に書かれた文字⇒直接型紙に関係する年代ではないが、少なくともその年よりも後に型紙が制作されたことを示す材料。

・紅型型紙調査から 「改変」された紅型型紙

「改変」の諸相

① いつ改変したのか

型紙が完成する前、型紙が完成した後⇒染色前/染色後

② だれが改変したのか

同じ彫り手が改変、別の彫り手が改変

③ どこで改変したのか

沖縄、その他の地域

④ なぜ改変しなければいけなかったのか

生地幅の変化、染色用途の変更、型紙の注文の誤り⇒なぜ新たに作り押さずに、既存のものに手を加える判断をしたのか

紅型型紙と商印

鎌倉芳太郎旧蔵の紅型型紙における商印を持つ型紙の割合

沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館 10 点（そのうち白子と明記 5 点、不明 5 点）/全 1414 点
沖縄県立博物館・美術館 4 点 /全 590 点

沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵の紅型型紙に押されていた商印

「小林兵右衛門」とは誰か

—そこで白子の古老にこのことを聞いてみた。

そのお話によると、白子の形紙は、琉球へはすべて薩摩を経て行っていたという。そしてこの琉球行きの形紙を扱ったのは、白子で只一件だけであって、土地の人はこれを「唐人(とうじん)さん」といっていたという。

上村六郎「三、本土の型紙と紅型」『沖縄染色文化の研究』第一書房、1982 年、149 頁。

何を明らかにすべく型紙を調査するのか

型紙の製作年

型紙製作や加工の発展史

文様の伝播と展開

紺屋の業務形態と販売内容

型紙の流通形態＝型売り商の商圏、型売り商のネットワーク⇒型紙コレクションの源流

2. 型紙調査の方法

制約の中の型紙調査 時間、人員、設備、経験

型紙コレクションの性格

当初のままの状態が保存されているのか

供給源が単体/複数なのか

コレクターによって、取捨選択がなされた後なのか

3. 型紙調査の装備

時間、人員、経験に合わせて柔軟に対応 ←何のための型紙調査か

調査先、調査対象、調査後のデータ整理等を考慮した装備←調査先の規定（調査時間、調査方法、使用機材、取り扱いガイドライン等）を順守することが必須

○型紙調査装備一覧

【取り扱い】

白手袋（ニトリル（パウダー無し）手袋が理想的）、マスク、ウェットティッシュ

【撮影】

デジタルカメラ（一眼レフ、小型カメラ）※単焦点マクロレンズが理想的、ただし、手持ちの撮影の場合 24 ミリの広角が便利、赤外線カメラ（一眼レフ、赤外線ライト、赤外線フィルターで代用）、予備バッテリー、バッテリーチャージャー、リモコン、三脚、ライトボックス、カウンター、カラーチャート、コンパクトフラッシュ、SD カード

【計測等】

調査記録用紙、メモ帳、ハンディライト、ヘッドルーペ、ハンディルーペ、メジャー（布タイプ、映しこみ用に目盛り部のみのもの 2 本）鉛筆、消しゴム、マジック（黒、赤）、ポストイット（大小）、輪ゴム、封筒、クリップ、マスキングテープ、養生テープ、糊、延長コード、コンセント変換プラグ、変圧器、パソコン、USB メモリ、カードリーダー

4. おわりに 型紙調査の有効性

「資料」としての型紙

「型紙」研究の充実、そして「型紙」研究からの発展

新しい「型紙」研究への土台

[illegible]

[illegible]

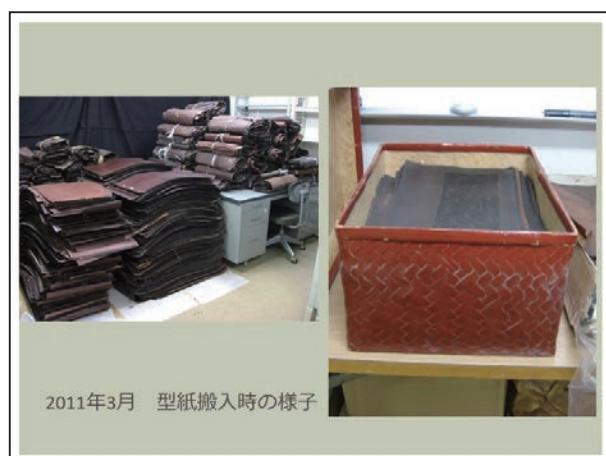
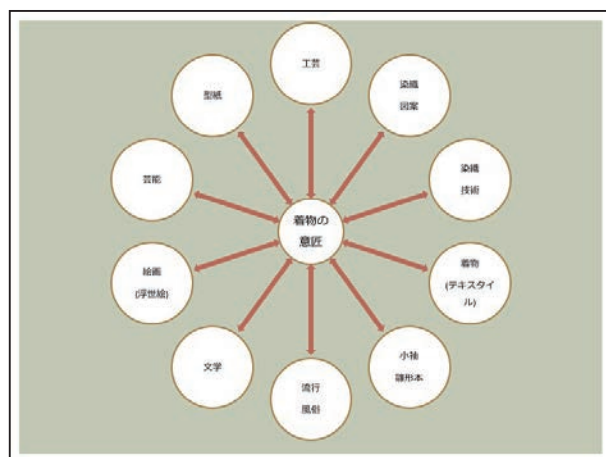
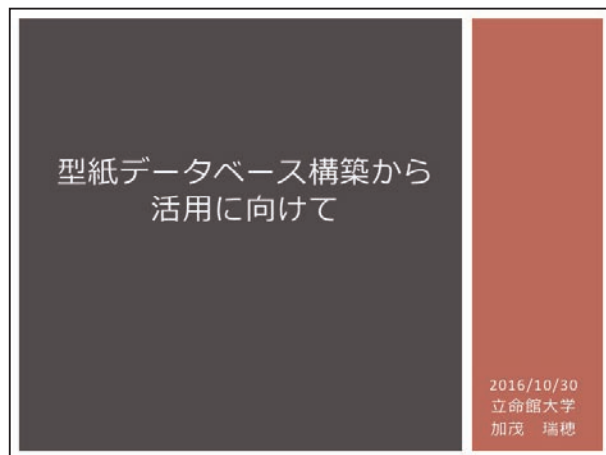
型紙データベース構築から活用に向けて

加茂瑞穂〈立命館大学 非常勤講師〉

立命館大学アート・リサーチセンターでは、京都市内で型紙を販売していた会社が所蔵する約18,000枚の型紙のデジタル化を2008年からスタートさせた。これを契機として、国内外の型紙コレクションのデジタル化を進め、2014年には型紙データベースを公開した。数万枚という大量の資料整理が可能な背景には、個人ではなくプロジェクトして活動できたことが大きい。

型紙のデジタル・アーカイブを進めることで、美術工芸のメディアを越えたデザインの比較研究が可能となり、学術研究として得られる恩恵も大きい。また、デジタル画像は型紙の専門家による利用に限らないため、型紙を現代生活へいかす活動へも協力することができる。「伝統的な」デザインを現代の生活へ応用する取り組みは、型紙への興味関心を高めるための効果も期待できる。その一方で、型紙を学術資料以外にも活用していくための課題も見えてきた。

本発表では、学術資料として型紙を共有することで得られる情報とともに、研究成果を社会的に還元していく方法・課題について考えてみたい。

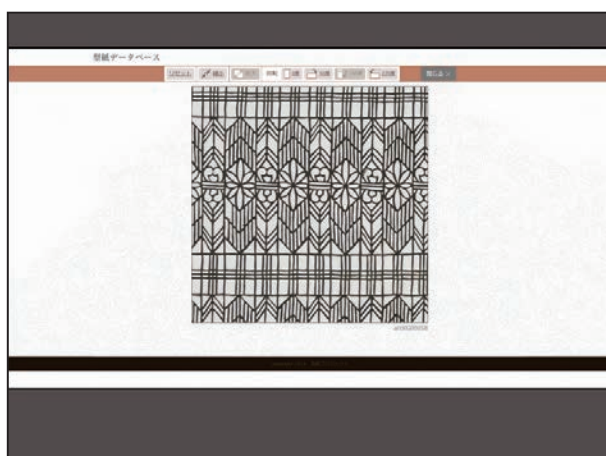


データベース構築の目的

1. 資料の目録として
 - 型紙の高精細画像を閲覧する
 - デザイン、書入れ、技法などを文字情報として収集
2. 研究への活用
 - 大量の資料から目的の資料を探し出す
 - 絵画資料、染織資料の情報と連動 研究の可能性を広げる

2.データベースの概要

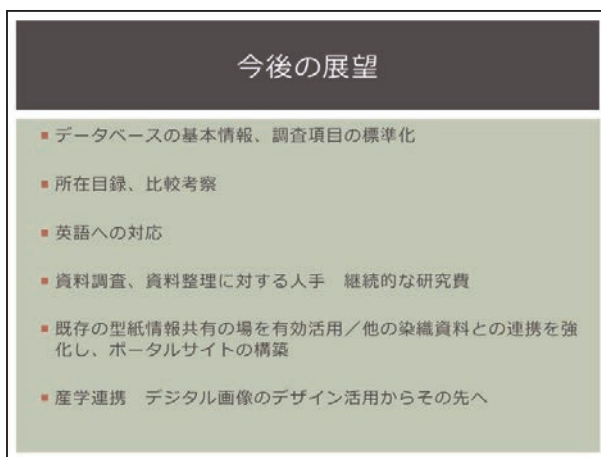
株式会社キョーテック HP <http://www.kyolite.co.jp/>



3. デジタルアーカイブの活用とその可能性



角川ソフィア文庫 柳田国男コレクション
<http://www.kadokawa.co.jp/yanagitakunio/>



立命館大学型友禅図案・型紙における 修復作業の実践と課題

木立雅朗〈立命館大学 教授〉

山本真紗子〈立命館大学 非常勤講師〉

枝木妙子〈立命館大学 先端総合学術研究科博士課程 院生〉

立命館大学では、2002年ごろより明治末～昭和初期の型友禅図案を収集、整理の上画像を撮影し、デジタル・アーカイブとして公開する作業を行ってきた。その過程で問題となったのが、破損している資料の取り扱いである。資料は長期間の保管による埃などで汚れており、型紙への転写の際に切断され、そこから破れが広がるなど、傷みの激しいものも少なくなかった。資料は総数で1万5千枚を超えており、予算や人手が限られる中、大学生が短期間のトレーニングで修復できるような手法を、文化財修復の専門家の指導により実施してきた。2015年度末には、戦後から2010年ごろまで活動していた型染業者より、新たに型紙の寄託を受けた。そこで、型友禅図案の修復の経験を活かし、型紙の性質にあった新たな修復方法を開発している。現在、整理作業への適用に向けて試験的に導入している。修復に使う道具や修復範囲の設定など本学の整理作業をもとに、実用的な修復の技法について論じていきたい。

20161030 型紙ワークショップ

「立命館大学型友禅図案・型紙における修復作業の実践と課題」

山本 真紗子
(立命館大学)

立命館大学 友禅図案の整理

- 大量の資料が段ボール箱に詰められた状態
- 長期間 染屋の倉庫、古本屋の倉庫で保管
→ 折り曲げ、ホコリやゴミ
⇒ 予算や技術はない。
人手はあった（学生たちの学芸員実習など）

図案の整理作業

- 燻蒸を経た後、
データベース用画像の撮影前準備として
(1) 番号の付与
(2) 汚れの除去
(3) 折れ・破れの修復
をおこなった

図案の整理作業



図案の修復作業—微小点接着法



微小点接着法

- 増田勝彦氏（昭和女子大学）考案
- 鈴木英治氏（吉備国際大学・当時）指導



山本真紗子「立命館大学アート・リサーチセンター所蔵友禅図案資料群の整理作業」文部科学省グローバルCOE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」（立命館大学）監修/富田美香ほか編『シリーズ日本文化デジタル・ヒューマニティーズ05 京イメージー文化資源と京都文化—』ナカニシヤ出版、pp.74~87、2012年

友禅図案→型紙整理

- 大量にあること＝予算、人員確保の問題
 - 現在は仮保管中→保管場所・保管の方法改善の必要
 - 酸化劣化の進行・硬化による破損（亀裂や割れ）の恐れ
- 予防的に修復をおこなうべきではないか

元興寺文化財研究所での研修



薄手の和紙（RK-00）
5cm幅にしたものを
セルロース（2%）をつかって
型紙の四方の端にはりめぐらす

2016年7月～8月
元興寺文化財研究所記録資料調査修復室
金山正子氏による指導



今後の課題

- 資料の整理・保管
- 修復—予算、人員
修復をほどこすことでの
メリット・デメリット

はじめに

2016年、立命館大学アート・リサーチセンターに大量の型紙が収蔵された。この中には酸性劣化し、取り回しの際に周辺がぼろぼろと破損してしまうものが混在していた。今後デジタルアーカイブ化を行う際に破損が進行することが予想されるため修復方法を検討した。本修復では、特殊な技能を持たない学生でも短時間で大量の資料を修復できることをコンセプトとしている。

修復にあたり、元興寺文化財研究所の金山正子氏に資料の状態を確認していただき、修復方法を考案・指導していただいた。ここでは周囲を補強し端から割れてゆくのを抑えることで、全体を保護している。メチルセルロースを使用しているため、水を含ませることで除去が可能である。また、極端に薄い紙を使用しているため、和紙の下の状態（場合によっては文字が書いてある。）も確認することができる。

本修復の特徴は、少しの技能を身につけることで誰もが修復可能である点と、簡単に除去できるように最低限の修復でとどめている点である。

用意するもの

- ・不織布（ポリエステルとポリプロピレンの混合のもの。）
不織布は糊で接着しないため、不要な部分に型紙が接着しないよう下に敷く等利用する。
型紙の全面に敷くと型紙に引っかかるため、6cm程のテープ状に切り修復部分に敷く。
表はポリエステルが多いためツルツルだが、使用すると分らなくなる。気になる場合は、「オモテ」等油性マジックで記入する。
- ・おもり（けさんに和紙をまいたもの、ステンレス定規を何枚か重ねて和紙でくるんだものなど。）
面で抑えられるものが望ましい。その場合は下記のベニヤ板は不必要。
- ・ベニヤ板（5cm幅）
おもりが面でない場合はおもりの下にベニヤ板を引き荷重を分散させる。
- ・濾紙（アドバンテック東洋のものを使用。）
厚くて吸水性の高いものであればよい。
長辺用、短辺用、繕い用と大きさにあわせて適宜カットする。
濾紙のまわりに不織布をまいておくとう便利。
- ・メチルセルロース（2%希釈。マヨネーズほどの硬さになる。）
- ・精製水（純水が望ましい。）
- ・刷毛（5cm幅、ヤギの毛。）
- ・小刷毛（1cm幅。）
刷毛でメチルセルロースが塗布できなかった部分を補うために使用するため上達すると不要。
- ・極細筆（繕い用。）
- ・小皿
- ・メス（デザインカッターでも代用可）
- ・耐水ペーパー（2000番）
メスを研ぐために使用。
- ・薄い和紙（紙舗直RK00を使用。）
周囲の補強に使用。RK00は、機械漉きの極薄和紙。
- ・美濃和紙（寿光2.4匁、3匁）
繕いに使用。那須楮100%、手漉き、板干しないしはステンレス干しのものを使用する。
経年により斑点の出ている「風邪引き紙」は使わないこと。
- ・金尺（15cm、30cm、60cm、100cm。必要に応じて使い分ける。）
- ・へら（鯨の骨が望ましいが竹で代用した。）
- ・ピンセット
- ・はさみ
- ・メジャー
- ・カッターマット



おもり



メス



刷毛



RK00

注意事項

- ・型紙は「折り曲げ」「ひっぱり」に弱いので、取り回し時には板等に寄せ、曲げないように注意する。
- ・判断可能であれば、すり面ではないほうに修復を行うようにした。

①、裂けている部分を補修する

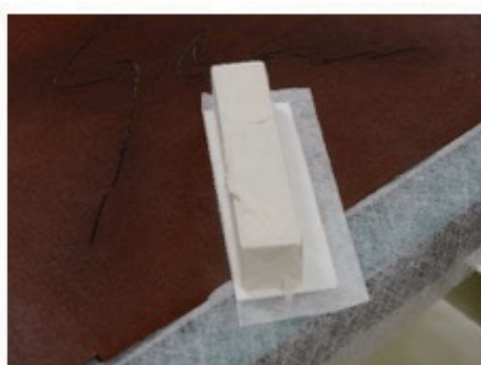
- 1、2,4刃の美濃紙を2,5mm幅にメスで切る。3刃の美濃紙で5mm幅の喰裂紙（くいさががみ）を作成する。
 - 2、紙の裂け目の部分の紙がどちらが上になっていたかを見極め整える。
 - 3、美濃紙を裂け目にあわせて切り、筆で美濃紙にメチルセルロースを塗り張る。
曲がった部分は和紙をまげてつけるのではなく、和紙を切って合わせる。
基本的に2,5mm幅で修復するが、大きな裂け目の場合は5mm幅で繕う。
 - 4、不織布と濾紙をあて、重しをおいて10~20分程度乾燥させる。
- ※ピンセットを使用すると作業が簡単である。

喰裂紙（くいさががみ）の作り方

- 1、5mmより少し太めに金尺を置き、細い筆で水を入れる。
 - 2、水を入れた部分をへらでなぞる。（水を下まで入れるため。）
 - 3、金尺を横にずらし、金尺で押さえながら、手で引っ張り、毛羽立った紙をとる。
- ※渋紙は紙の向きがないため、補修用のテープは糸目に平行にとればよいが、紙の場合は本紙にあわせること。



繕った部分



重しを置き乾燥する

②、四辺に、和紙を貼る。

- 1、薄い和紙（RK00）をメスで5cm幅に切りテープを作る。
 - ・ RK00は薄いため、カッターでは引っかかってしまい正確に切ることができない。
 - ・ 人が横を通りすぎる等すると飛んでしまうため、紙の上に軽くおもりを置いておくといよい。
 - ・ 紙が薄いため、紙の目はどちらで取っても構わない。
 - ・ 金尺の上におもりを置くと正確に切ることができる。
 - ・ メスはこまめに2000番の耐水ペーパーでこすると切れ味が戻る。
- 2、型紙が下に接着しないよう不織布を敷く。
- 3、型紙の端にあわせ和紙のテープを置き、その上から刷毛でゆっくりなぞるようにメチルセルローズを塗布する。
※型紙から出た部分の和紙におもりを置いて、和紙がずれないようにしておく。
- 4、塗り残しを、細刷毛で補う。
- 5、メチルセルローズが十分にいきわたったら、すぐに不織布と濾紙をあて、水分を吸わせ、その上からベニヤ板とおもりをおいて数十分〜一日乾燥させる。
※長辺のみ短編のみと決めて修復を行うと、型紙を重ねられるため効率的。
- 6、乾燥後、15cmの金尺をあて余分を切る。本紙を切らないように最新の注意を払う。

※途中で千切れた場合は千切れた部分を整え、続きからつないで貼っていく。
つなぎ目は刷毛を進行方向と逆になで、裂けた部分をなじませてから続きを貼る。

メチルセルローズの作り方

- 1、メチルセルローズ4gに対し、沸騰したお湯100ccを注ぎよくかき混ぜる。
 - 2、よく冷やした冷水100cc を注ぎよくかき混ぜる。
 - 3、白く濁りが残った場合は、冷蔵庫で一晩冷やす。
- ※水は純水又は精製水を使用する。



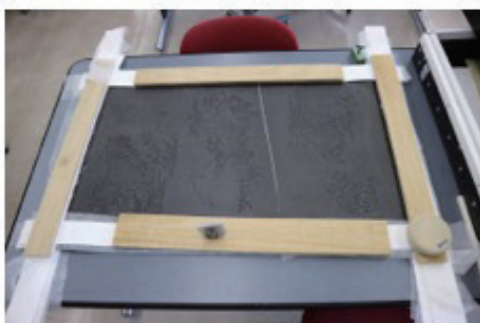
RK00を裁断する



メチルセルローズを塗る



メチルセルローズを塗る



型紙を乾燥させる



余分を切る



完成した状態

ここまで、修復の方法を説明してきた。しかし本方法が確定しているとはいえない。下記に修復作業を実際に行ったことで明らかとなった問題点とシンポジウム内での指摘を挙げた。本実例が型紙修復の検討材料となり、修復方法確立のための一助となれば幸いである。また、型紙の保存の現状に関心が寄せられるようになることを期待している。

問題点

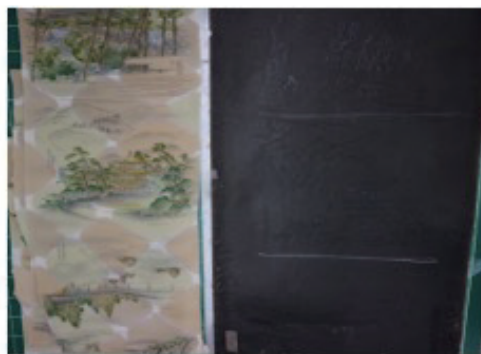
- ・型紙の裏表を判別することが困難。
- ・修復作業を行うために、広いスペースが必要。
- ・時間と労力の兼ね合いから、所蔵されている全ての型紙を処理することはできない。
→そのため、修復が必要か判断できる人材が必要。

シンポジウム時の指摘

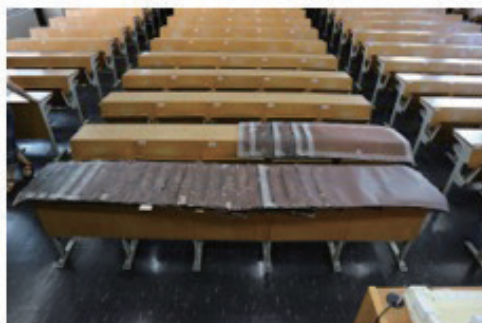
- ・型紙にシワがよる。
→以下の2点が原因と考えられる。
 - ・塗布するメチルセルロースを水で溶きすぎてしまっている。
 - ・おもりが十分に重くない。
- ・和紙を本紙に貼り合わせた後に、余分な部分を刃物で切るのはよくないのではないか。
- ・残りが良いために、処置する必要はないのではないか。



作業風景



刷り上がった反物と並べて



完成した状態

ARC メソッドによる文化資源アーカイブ

赤間 亮〈立命館大学 教授〉

立命館大学アート・リサーチセンター（ARC）は、1998年の設立以来、文化芸術分野のデジタルアーカイブ（DA）を重点的な研究課題としてきた。1990年代半ばに和製英語として広まった「デジタル・アーカイブ」であるが、1990年代は、いわゆる掛声だけで、実際の技術が伴っておらず、DAが実質を伴って進行している機関はなかった。しかしARCでは、すでに1999年には浮世絵や古典籍のデータベースを開発し、イメージデータベースを使った研究をスタート出来ていたのである。

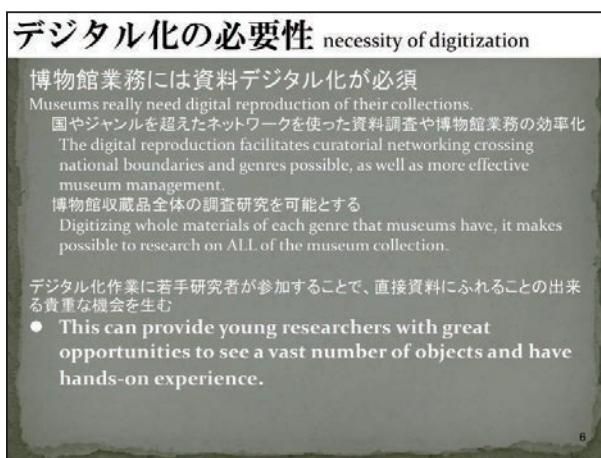
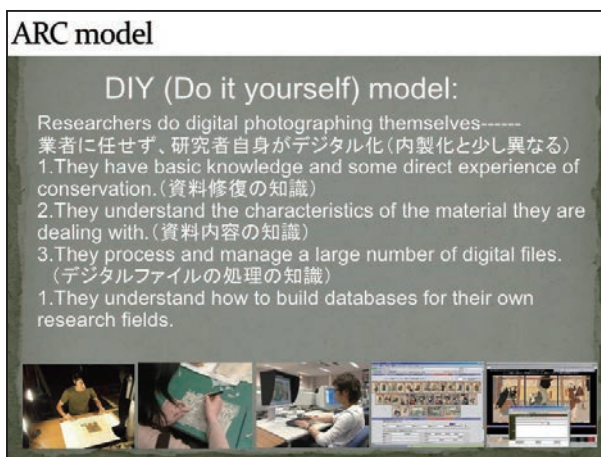
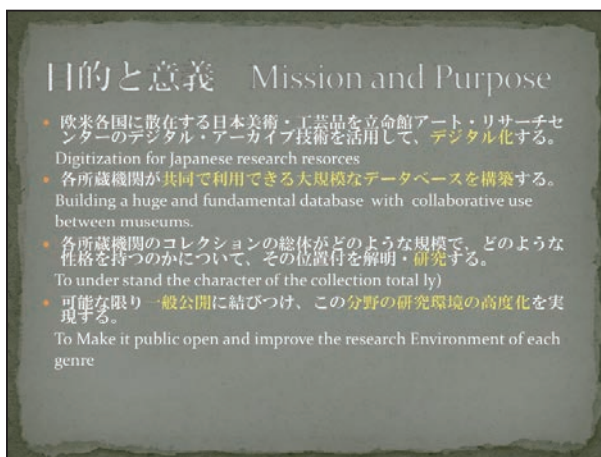
その後、2002年からは海外の博物館や図書館に所蔵される日本美術品のDAを実施するプロジェクトがスタートしているが、型紙も当然その対象となっていた。ARCでの最初の型紙のデジタル化は、株式会社キョーテック所蔵品約18,000枚である。この型紙のアーカイブのなかで、型紙に特化した撮影方法も開発し、また、型紙用のデータベースも開発していった。

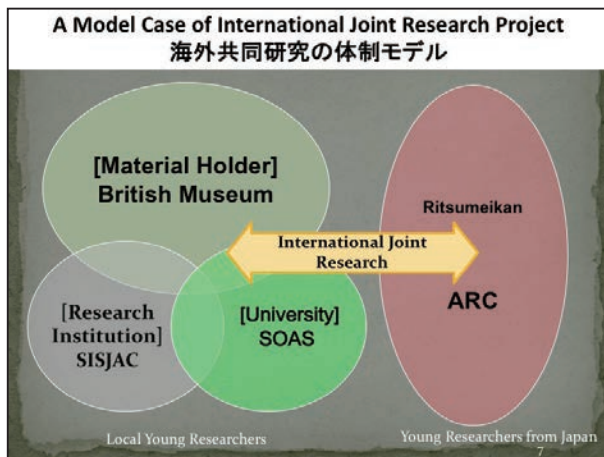
ARCにおける資料のデジタル化手法は、業者委託が通常の方法となっている他の組織とは異なったものであり、修復、保存、デジタル化、データベース化、オンライン公開などのきめ細かな技術が貯えられていった。現在、ARCではこの技術やノウハウをできるだけ広く公開し、デジタル時代に相応しいデジタルヒューマニティーズ型研究を推奨・推進している。この方法は現在、「ARCメソッド」として知られるようになった。

その詳細については、発表（スライド）に譲るが、第一に高精細なデータでありながら、高速、しかも安全、情報も的確に取得するという方法である。それは、研究者自身が何を、何のためにデジタル化するのかを十分に検討した上で、デジタル技術や資料に対する専門的な知識を駆使してデジタル化するというもので、場合によっては修復に関する知識を身につけた、マルチな人材によるデジタル化の方法である。また、データベースも資料の本質をよく理解した上で設計し、自らデータベースの管理者となって運用するというものである。これだけの説明では、そんな理想的なことは不可能と思われるかもしれないが、デジタル技術の革新は、それを修得するための時間を極めて短くしてくれた。そのため、研究者の意欲さえあれば、多くの人が、マルチな人材となることができるのである。

データベースは、現在、リンクトオープン型が主流となってきているため、所蔵機関とARCのデータベースを相互に繋げることを進めている。これに例えば、Ukiyo-e.org (<https://ukiyo-e>).

org/) のような特別な機能を持つデータベースをも含め、3者がトライアングル型で双方向にリンクすることで、単なるオンラインデータベースではない、多機能データベースとなる。こうした連携型オンライン展開は、型紙研究においてはまさに最適な方法になると予想され、ARCの型紙研究グループに対する役割・貢献もここにあると考えている。





国際型ARCモデルの実際

イタリアでの事例:

- (1) (日・伊)現地学生・研究者のデジタル撮影参加
- (2) (日)デジタル技術・資料の理解に関するワークショップを開催
- (3) (伊)撮影チームのリーダーとして、独立してデジタル化を実施
- (4) (日)オンライン編集可のイメージデータベースにデータ登載
※日本語のメタデータ
- (5) (伊)日本語のデータベースを参照しながら、イタリア語目録を作成
- (6) (日)ヴェネチア大学で浮世絵の基礎知識にかわる教育活動
※ヴェネチア東洋美術館の所蔵品による
- (7) (伊)イタリア側スタッフ・学生の日本短期・中期留学

技術移転、情報共有化・知識移転
⇒人材育成

ARCメソッドがきっかけで開催につながった展覧会 (2013年以降)

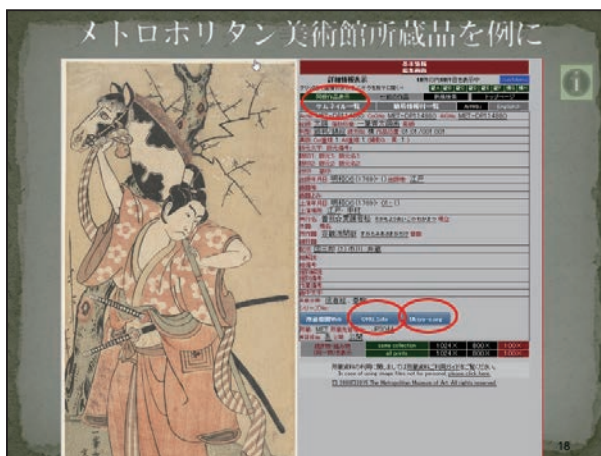
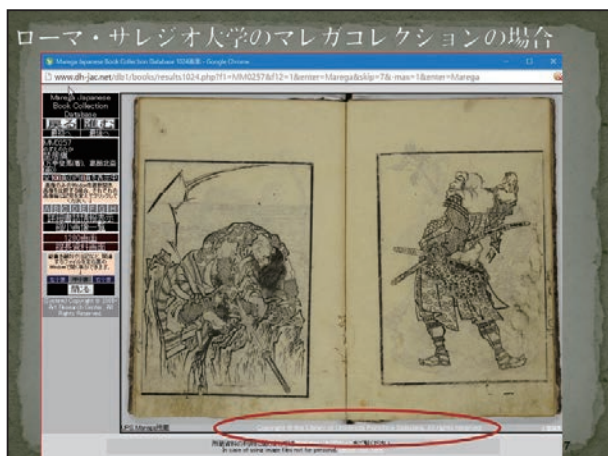
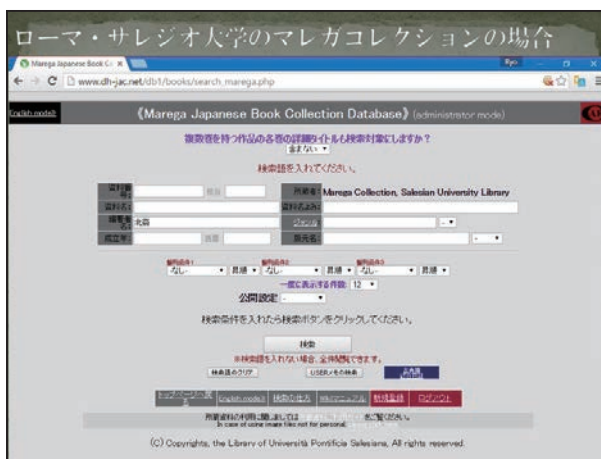
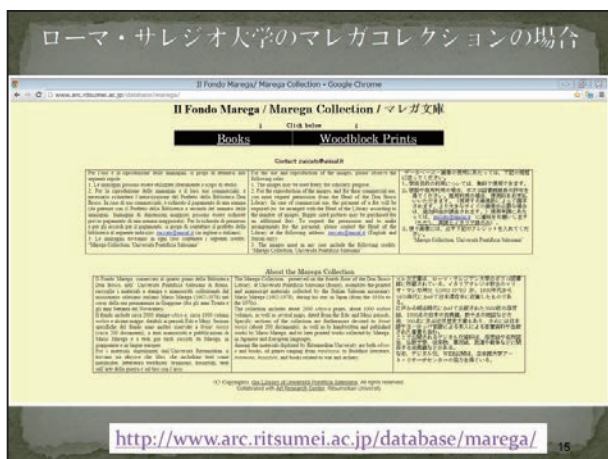
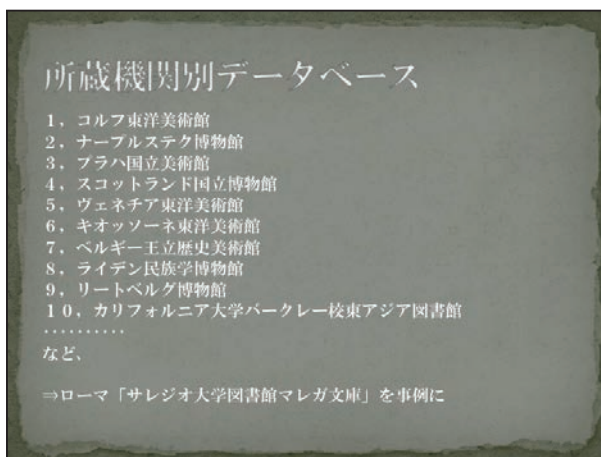
- 2013.9.8～
ヴェネチア東洋美術館
「北斎展」
- 2013.10.8～
大英博物館
「春画展」
- 2014.10.12～
ジュネーブ歴史美術博物館
「役者絵展」
- 2014.11.8～
ヴェネチア東洋美術館
「広重展」

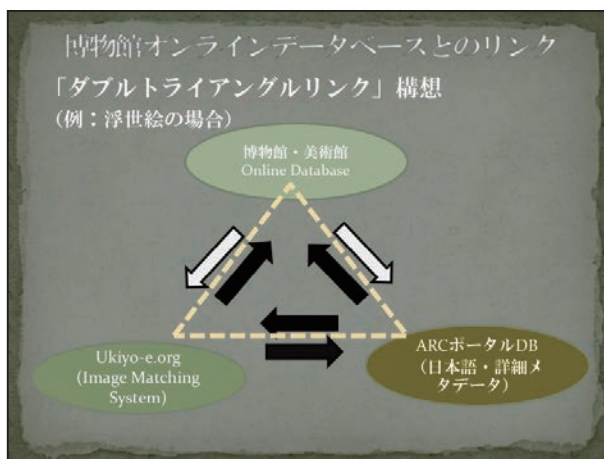
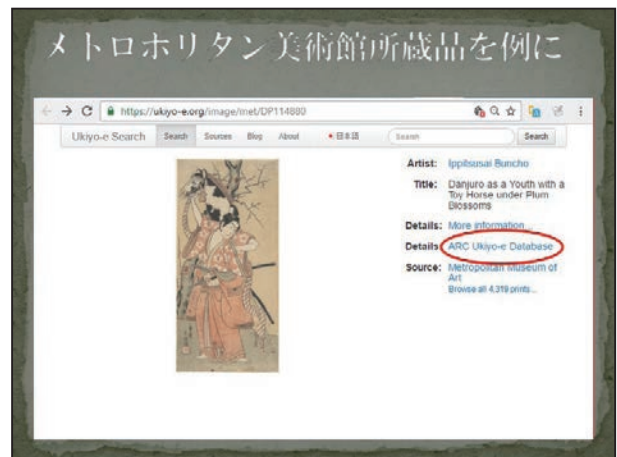
LA GRANDE ONDA DI HOKUSAI
TOCCARE IL SENTIMENTO DELLA FORMA
MUSEO D'ARTE ORIENTALE
08.09 - 03.11.2013



その他の国際型ARCモデル実施例

- ・イタリア・ローマ・サレジオ大学マレガ文庫
- ・英国・大英博物館
⇒立命館卒業生・プロジェクト学芸員採用2名
- ・アメリカ・フリーア美術館
- ・アメリカ・メトロポリタン博物館
⇒立命館学生・正規学芸員採用
- ・チェコ・ナーブルステク博物館
- ・チェコ・プラハ国立美術館
⇒現地学生・学芸員採用
- ・オランダ・ライデン民族学博物館
⇒現地学生・学芸員採用
- ・ドイツ・ベルリン東洋美術館
- ・スイス・リートベルグ博物館 など





まとめに代えて

- 1, データの蓄積は誰が行うのか
ビッグデータの時代に相応しい情報量
⇒臨界点に迫り着くまで蓄積することが必要
解答としてARCモデル
- 2, 継続・継承問題
データの更新・追加
システム更新・システム環境の変更・管理者の変更
⇒DA・DB開発能力のある人材育成の必要性：教育強化
解答としての立命館大学文学研究科
「文化情報学専攻」

3, WEB上の資料公開サイトが突当る二面性のバランス
⇒一般向けかプロフェッショナル向けか？
・魅力あるインターフェイスの開発：一般向け
(デジタル展示サイトが有利=Google Art & Culture)
・学術的カタログとしてのDB：研究者・プロ向け
DBを一般閲覧者向けに作り込む必要があるのか？
⇒有料サイトか無料サイトか
(従来の出版型を継続するか？)
・無料メディアとしてのインターネット：
究極のボランティア・平等主義による参加機会の提供
・有料化による高品質保証：ユーザーの差別化
⇒資金循環型高度文化社会の維持はどちらが有利か？

型紙研究における立命館大学アート・リサーチセンターの役割・寄与の可能性

文部科学省「共同利用・共同研究拠点」(2014~2019 6年間)
「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」として活動

- ・ リーズナブルかつ高品質のデジタル・アーカイブ化業務
- ・ 機関横断型、あるいは共同利用型のオンラインデータベースシステムの提供
- ・ 共同研究のために必要なオンライン会議システム、フォーラムの設置
- ・ 各組織間連携のためのコンソーシアムの運営

会場の様子



本報告書の完全版・カラー版は以下で公開しています。

<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/app/news/pc/001188.html>

国際ワークショップ

「学術資料としての『型紙』 ―資料の共有化と活用に向けて」 報告書

2017 年 3 月 31 日 発行

- [編集] 鈴木桂子・加茂瑞穂〈立命館大学〉
- [表紙] 石村乃緒子
- [レイアウト] prizms design (<https://prizms.net>)
- [印刷・製本] 株式会社 田中プリント
- [発行] 立命館大学アート・リサーチセンター
〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町 56-1
075-466-3411 (代表)

2016 年度 立命館大学 研究成果国際発信プログラム「国際的な型紙研究の基盤構築と活用に関する研究」

2016 年度 立命館大学 日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点 研究拠点形成支援プログラム「京都における伝統産業資料の保存と活用プロジェクト」

国際ワークショップ

学術資料としての『型紙』—資料の共有化と活用に向けて

2016年10月29日(土)13:00-18:00・30日(日)9:30-16:40

於:立命館大学アート・リサーチセンター



[主催] 立命館大学 研究成果国際発信プログラム「国際的な型紙研究の
基盤構築と活用に関する研究」、立命館大学アート・リサーチセンター

[共催] 立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 共同利用・共
同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」《デジタル・アー
カイブ手法を用いた近代染織資料の整理と活用プロジェクト》